

教職大学院 Newsletter

No. 173

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2023.7.7 (公開版)



Egyptian Japanese Schools (EJS) Project

エジプト日本学校プロジェクト

Director of the Egyptian Japanese Schools Project Management Unit
Ministry of Education, Arab Republic of Egypt

エジプト・アラブ共和国 教育省 エジプト日本学校プロジェクト運営ユニット ディレクター

Malek Ahmed Elrefai

(マレク・アハメド・エルレファイ)

My name is Malek Ahmed Elrefai, Director of the Egyptian Japanese Schools Project Management Unit (PMU) at the Egypt's Ministry of Education.

In 2015, the Government of Egypt announced the "Sustainable Development Strategy: Egypt Vision 2030". "Education and Training" is one of the four pillars under the social dimension domain, and its strategic objective for basic education sub-sector includes the following:

- Improving the Educational System's Quality to Conform with International Systems
- Availing Education for All without Discrimination
- Enhancing Competitiveness of the Educational Systems and its Outputs

The Ministry of Education and Technical Education (MOETE) launched a large-scale education transformation initiative called "Education 2.0 (EDU2.0)" in 2018, which aims to provide the next generation youth with holistic learning experiences to acquire meaningful life

skills and shape their character. Egypt and Japan agreed on an initiative called "Egypt-Japan Education Partnership (EJEP)" with the aim to empower Egyptian youth, as an important component in their endeavors, to combat terrorism and extremism and to enhance peace, stability, development, and prosperity. EJEP covers pre-school education to tertiary education stages with several projects and programs funded by the Japanese, as well as the Egyptian government. The EJEP Project focuses on building a school education model at the basic education level that can nurture the children who will become the next generation of the Egyptian youth.

Under the EJEP partnership, the two countries agreed to introduce Japan's holistic

内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(4)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(19)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(22)
5 月月間合同カンファレンス報告	(30)
運営協議会実施報告	(34)
公開研究会等の紹介	(35)

educational curriculum model, known as Tokkatsu Activities into the Egyptian Education system in three major types of schools across the country. First, experimental stage in 12 government schools “Pilot schools” (2015-2017); Second, Egyptian Japanese Schools model (100 newly constructed Schools); Third, introducing Tokkatsu model into Government schools (100 government schools). The project will cover 212 schools nationwide with a dissemination strategy to sustain the implementation of the holistic educational model into the Egyptian Education system in the coming years.

Another program was launched in 2018 for Human Resources development under the Ministry of Higher Education to provide professional development training for EJS teachers in Japan to learn more about Tokkatsu and other fields to be able to carry out Tokkatsu activities in their natural environment. This project is run and developed by the Department of Professional Development of Teachers, University of Fukui. Up till June 2023, we

managed to send 7 batches to the University of Fukui with about 250 participants under four programs; School Management, Tokkatsu Activities, Tokkatsu Activities and Lesson Study, and Early Childhood Education.

This program is expected to continue till December 2025. On the other hand, the PMU also plans to extend the cooperation with the University of Fukui through continuous collaboration and sharing of recent practices in the Fukui Roundtable, Egypt and Fukui University Special Roundtable Session and through exchange of visits.

As the project is still in progress with 51 EJS schools, 30 Government schools, and the 12 pilot for the years 2023, with about 2000 teachers and the expected expansion of both teachers and school numbers, cooperation with Fukui university will considerably expand and more fields of cooperation between the two countries is expected to be maximized in the Education sector.

(以下、日本語の仮訳です)

私の名前は、エジプト教育省エジプト日本人学校プロジェクト管理ユニット (PMU) のディレクター、マレク・アハメド・エルレファイです。

2015 年、エジプト政府は「持続可能な開発戦略：エジプト・ビジョン 2030」を発表しました。「教育と研修」は社会的側面領域の 4 つの柱の 1 つであり、基礎教育サブセクターの戦略目標には次のものが含まれます。

- ・ 国際制度に準拠するための教育制度の質の向上
- ・ すべての人への差別のない教育
- ・ 教育システムとその成果の競争力の強化

教育技術教育省 (MOETE) は、2018 年に「教育 2.0 (EDU2.0)」と呼ばれる大規模な教育改革イニシアティブを開始しました。これは、次世代の青少年に有意義なライフスキルを身につけ、人間形成を図るため

の総合的な学習体験を提供することを目的としています。エジプトと日本は、テロや過激主義と闘い、平和、安定、発展、繁栄を促進するための重要な要素として、エジプトの若者に力を与えることを目的とした「エジプト・日本教育パートナーシップ (EJEP)」と呼ばれるイニシアティブに合意しました。EJEP は、日本政府とエジプト政府が資金提供するいくつかのプロジェクトやプログラムで、就学前教育から高等教育段階までをカバーしています。EJEP プロジェクトは、エジプトの次世代の若者となる子供たちを育成できる基礎教育レベルの学校教育モデルの構築に焦点を当てています。

EJEP パートナーシップの下、両国は特活（特別活動、以後「特活」）として知られる日本の総合的な教育カリキュラムモデルをエジプトの教育システム、すなわち全国にある主要な 3 種類の学校に導入する

ことに合意しました。まず、12 の公立学校「パイロット校」での実験段階（2015～2017 年）。第二に、エジプト日本学校モデル（新設 100 校）。第三に、特活モデルを公立学校に導入する（公立学校 100 校）。このプロジェクトは、今後数年間でエジプトの教育システムへの総合的な教育モデルの導入を維持するための普及戦略を備え、全国の 212 の学校を対象とします。

2018 年には、高等教育省の下で人材育成のための別のプログラムが開始され、日本の EJS 教師に特活やその他の分野について学び、自然環境の中で特活を行えるよう専門能力開発研修を提供しました。このプロジェクトは、福井大学教職大学院によって運営および開発されています。2023 年 6 月までに、私たちは 学校経営、特活、特活と授業研究、幼児教

（編集部注）エジプト日本学校プロジェクト開始の経緯については、以下の「日エジプト共同声明」「エジプト・日本教育パートナーシップ」も参照ください。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/me_a/mel/eg/page4_001828.html

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000136266.pdf>

文中紹介されている福井大学教職大学院による研修プログラムは、これらの合意に基づき、エジプト政府と協働で実施されています。こちらも参照ください。

<https://www.u-fukui.ac.jp/news/43797/>

<https://www.u-fukui.ac.jp/news/44604/>

<https://www.u-fukui.ac.jp/news/48688/>

<https://www.u-fukui.ac.jp/news/54217/>

育の 4 つのプログラムで、7 つのバッチ約 250 名の参加者を福井大学に派遣することができました。

このプログラムは 2025 年 12 月まで継続される予定です。一方、PMU は、福井ラウンドテーブル、エジプト・福井大学特別ラウンドテーブル及び相互訪問を通じた継続的な協力と最近の実践の共有を通じて、福井大学との協力を拡大することも計画しています。

このプロジェクトは、現在も EJS 学校 51 校、公立学校 30 校、そして 2023 年のパイロット校 12 校、総勢約 2,000 人の教員と進行中であり、教員数、学校数共に拡大が見込まれることから、福井大学との協力は大幅に拡大し、教育分野における両国間の協力の分野がさらに拡大することが期待されます。



院生自己紹介

今号では、4月に入学した学校改革マネジメントコース（1年履修）の院生を紹介しています。

鯖江市神明小学校 岩佐 麻衣子（いわさ まいこ）

はじめまして。今年度、入学した岩佐麻衣子です。昨年度から事前履修として少しだけ教職大学院の学びに参加し、ご一緒させていただきました。今まで、このような学びの場に参加することがなかったので、毎回、新鮮な気持ちで楽しみながら参加させていただいています。

現在は、鯖江市神明小学校に勤務し、小学2年生の子ども達と一緒に、元気に過ごしています。子ども達は、休日におでかけしたこと、友達とのエピソード、草むらで見つけたカナヘビのこと…思い思いのことを語ってくれます。なかには、大好きな恐竜の真似を披露し続ける子もいます。私も歳をとったのか、孫を見るような心もちで聴くことができるようになってきました。しかし、いろいろな場面で、かつては当たり前だと思っていたことが、今は当たり前でなくなってしまったのだと覚えることがあります。時代の流れがとても速く、今まで「こう、あるべき」と思ってきたことが、大きく変革していることを感じます。今、学ばなければ、この変化についていけなくなるのでは…という危機感から、教職大学院で学ぶことを決意しました。

これまでは、自分の仕事だけでいっぱいだったのが、月間合同カンファレンスやクロスセッション等に参加し、様々な立場の方からお話を聞いたり、自分の実践を振り返って価値づけをしたり、他愛もない会話をしたりすることで、気持ちが明るくなり学ぶたのしさのようなものを感じています。みなさんが肯定的に話を聞いて

くださるので、今までの頑張りが認められたような何とも言えない嬉しい気持ちになり、次も頑張ろうという活力が湧いてくるので、不思議です。

また、4月のカンファレンスのクロスセッションで「共感できる人やものを重視しがちである。だからこそ、異質なものを大切にしなければならない」「同じものを見て、違う視点をもつのは他教科を専攻している人である。そこで、思考の交流が必要である」という話になりました。新たな価値を創出するには、自分と異なる視点をもつ人との対話が不可欠であるのに、私は共感できる人や自分に賛同してくれる人との対話を重視し、異なる考えをもつ人との意見交流や議論は極力避けてきたことに気付きました。このように、今まで気付かなかったことに気付かされたり納得させられたりして、自分の視野が広がっていくことにワクワクし、これが学ぶたのしさなのかと感じています。

現任校では、研究主任として研究主題「自ら学び共に高め合う子の育成」をめざし、教師が連携して全校で研究実践を進めるための組織づくりに取り組んでいます。『自分から』を合言葉に主体的に行動する教職員や子ども達をめざして学んでいきたいと思っています。

最後に、毎月のレポート提出や長期実践研究報告書の作成には不安しかありませんが、何とか頑張りたいと思っておりますので、これからもよろしくお願いいたします。

福井県立美方高等学校 岩本 守聰 (いわもと もりとし)

今年度、院生として入学しました岩本守聰です。昨年度は事前履修で大学院を経験しました。現在、県立美方高校に勤めて5年目になります。

私は昨年度、2年担任と学年の探究指導・進路指導の先導役をさせていただきました。現在は3年学年主任です。今でも、過去の私はよく入学しようと思ったな、と思ってしまいます。しかし当時の私は、今までの私の実践はこれでよかったのか、どの方向に進んでいくことが本当の教育と言えるのか、という自問の中で、自分の歩みに対する不安感を拭えずにいたのだと思います。私は今までがむしゃらに目の前の問題を改善しようとして行ってきた活動を客観的に検証し、全体的な視野でとらえ直したいという欲求と、これから進むべき未来の教育について詳しく知りたいという願望を持って、今ここにいます。

私は初任地が敦賀高校、その後若狭高校と、進学指導と部活動に真剣に取り組んでいる高校で最初の十数年を過ごしました。ある程度の受験指導や生徒支援ができるようになり、進路指導や国際交流活動にも貢献できるようになってきた頃、若狭高校の定時制に異動することになりました。そこで私は、当時は想像もできなかったような大変な環境の中で、不器用ながら必死に生きている生徒たちに出会い、ショックを受けたことを鮮明に覚えています。最初の3カ月で私のクラスから延べ9名の謹慎処分者が出、私自身4月はずっと体調を崩し、慣れるのに時間がかかりました。ピアス化粧はもちろん、茶髪喫煙、キレる、サボる等の問題に加え、緘黙症や外国人の生徒、てんかんやうつ病、知的に遅れのある生徒や家庭内暴力を受けている生徒等、実に多様な特徴を持つ生徒が1クラスに共存していました。まさに人生の探究とも言える3年間でした。しかしこの時期の学びはとても大きく、私の教育観の土台として今も心の中に存在しています。

その後一念発起して、私は中学校に異動しました。最も忙しいと言われる中学校の教育の中に、定時制

での教育の根源に通じるものがあるのでは、と考えたからです。定時制での経験を経た当時の私でも、39歳という年齢で人生初の中学校教員生活に転じる決意をすることは、とても勇気がいることでした。

異動した三方中学校では、1年目、やはり慣れるまでに非常に苦勞をしましたが、2年目に3年生総合学習の先導役を引き受け、私の探究学習の原点がスタートしました。勉強が嫌いな中学生も生き生きと探究学習に取り組む姿を見、どんどん地元を好きになっていく生徒たちを肌で感じ、探究学習の持つ魅力と可能性を見た気がしました。私自身も地域の方々とのつながりが一気に増え、地域の課題や解決策を生徒とともに必死に考えることは、大変でしたがとても楽しい経験でした。

5年間の中学校生活を終えた私は再び高校に戻り、現在美方高校で魅力化の中軸に探究を据え、仲間の先生とともに様々な事業を進めてきました。その1つである探究学習の持つ魅力はとても素晴らしいものがありますが、反面落とし穴もあります。発表会前の教科授業のカットや教員の多忙化への拍車、外部企業とのトラブルや生徒の熱意の格差等、整備すべき問題は多々あります。しかし、それ以上に探究学習は今までになかった教育の広がりをお私たちに与えてくれます。そこでできたつながりや学びは生徒の自己肯定感を育み、学びへの向上心を育ててくれます。私達が育んできたこの学習を、この1年間で様々な角度から検証し、同時にその周囲で起こる問題をどう解決していけるかを、大学院の先生方や共に学ぶ方々とともに考えていけたらと思っています。

昨年、この大学院で経験させていただいたラウンドテーブル等の教育の手法は、今の時代に必要な教育手法だと感じる事ができました。様々な方々が現場で起こっている課題の解決に向け実践しておられる姿は、その課題内容は違えども、とても影響を受けている自分がいます。そのような仲間が全国におられるのだとわかるだけで、学ぼうという意欲と勇

気が湧いてきます。そんな集団の一員になれること、そして自らの課題を少しでも解決の方向に導いていくきっかけをいただけることが、私にとって何よりの宝になると感じています。

最後になりましたが、私自身、謙虚さを忘れず学び続ける者として、これからも精進していきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。皆さんとたくさん語り合えることを楽しみにしています。

福井市進明中学校 笠松 政世 (かさまつ まさよ)

教員をしていると、自己紹介する場面に幾度となく遭遇します。しかし、その場面と伝える相手によって、内容は異なっています。定期異動の4月職員会議の際は同僚に向けて。異動した時の新任式の際は、子どもに向けて。授業開きの際は、持ちクラスの子どものみに向けて。PTA 総会の際は、保護者に向けて。PTA 広報誌の職員自己紹介原稿では、いくつかの質問に答える形式で。等々。

私は何者か？相手の知りたいこと、相手に伝えたいことを考えて、自身を振り返る機会となります。今回は、教職大学院で学ぶ共に学ぶ“学友、同志”に自分を知ってもらう機会なのですから、何をトピックにするか少々悩みましたが、私が学級担任をしていた頃（現在は教務主任）、必ず教室に掲げていた孔子の「論語」の言葉を引用し、自分を語ることにしました。

「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」

学級作りの際、集団の中の個人のあるべき姿として掲示していたものです。この言葉は、自身が中学生の時、国語の教科書に載っていた言葉であり、印象深い言葉だったことを覚えています。私も「君子でありたい」と14歳の中学生の私は想いました。今でも私の行動の指針になっていると言っても過言ではありません。

「学びて思わざれば即ち暗し、思いて学ばざれば即ち危うし」

この言葉も必ず教室掲示をしていた言葉です。学ぶ意味、自分自身で考える事の大切さ、学び続ける姿

勢を子どもたちに伝えるために掲げていました。教職大学院で学ぼうと決意するに至ったのは、この言葉が私の中にもあったからだと思います。

「学びて時に之を習う、よろこばしからずや」

英語教師として、子どもが教室で学び、家庭で学習を振り返り、次の学びに繋げていく中で自分の力がついていく喜びを実感できる場所としての学校、そんな授業・学校創りに取り組んでいます。そして、教職大学院での学びが自分の喜びとなっていると感じています。

「三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る」

私は昨年、天命を知る年齢になりました。ところが、「天命は？」と問われると、答えられないまだまだ未熟な私です。天命どころか、惑い多き私です。しかし、教職大学院で学びを深めることで、天命を知ることができると思っています。そこに、惑いや迷いは一切ありません。

ここまで書いて、自己紹介の締め括りにします。私の愛読書（ほとんど読書はしませんが・・・）は孔子の「論語」です。自分自身は聖人君子とはかけ離れた人物ですが、「こうありたいと描き続けること」が大切だと思います。これから共に実践研究を語り合う同志の先生方、宜しくお願いします。

福井市清水中学校 川崎 多花子 (かわさき たかこ)

今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学した川崎多花子と申します。現在は福井市清水中学校に勤務しています。どうぞよろしくお願いいたします。

教員に採用されてから20年余り小学校で勤務していました。中学校勤務は本校が初めてで、本校勤務になった5年前は、中学生との距離感が分からず、戸惑ったのを覚えています。小学校ではわずかに出入りがありますが、担任したクラスの児童と一日中一緒に過ごしていました。そのため、いつも担任が児童の状態を詳しく理解していました。中学校では担任しているクラスで授業がない日もあり、給食とホームルームの時間だけクラスの生徒と過ごす日もあります。中学校では、担任した生徒と接する時間がわずかになりました。部活動の指導も初めてで、どのように指導すれば良いか戸惑い苦労しました。良かったこともたくさんあります。中学生だからできる生徒中心の学校祭は準備段階から自主的に活動する素晴らしい姿を見ることができました。異校種を経験したことで学校の文化、教員の系統、働き方が違うことを肌で感じ、とても良い経験をしたと実感しています。また、昨年度は、1学年主任と学習・教科領域・学力向上主任になり、学校全体に目を向けることを強く意識し、学校改革に取り組んでいきたいと考えるようになりました。このようにまだまだ学ぶことが多いと感じていた昨年、校長先生から勧められ、事前履修として、集中講座やラウンドテーブルに参加させていただきました。

教職大学院で学ぶことで、何度も自分の実践を振り返ることができました。教員生活を送る中で、どんな立場であっても教職員全員が学校組織マネジメン

トとカリキュラム・マネジメントの視点をもって日頃の教育活動に取り組むべきであり、常に「子ども達のために、従来の教育を見直していく」ことが大切であると実感しました。また、講義を聞いたり語り合ったりする中で、毎年しているから、今までしていたからという先入観にとらわれずに、何のためにしているのか問い直し、今の自分にできることを考える必要性を強く意識するようになりました。

本校には素直な生徒が多く、友達と協力しながら目標に向かって努力する姿を多く見ることができます。さらに学校を発展させるために、自分で考え、動くことができる生徒がもっと増えてほしいです。生徒自らが考え、行動できるような学校改革を、生徒・教職員・保護者・地域など生徒を中心に皆の力を合わせて進めていきたいと思います。今年度もその実践をさまざまな学校の教職員と地域や校種を超えて交流し、語り合いたいと思います。学校によって立地条件や施設、地域などの環境が異なっているので、取り組みも多様であり、学校の主体性と創意工夫によって学校を改革する可能性を感じることができます。そして何より、それぞれの実践を語り合うことで、自分自身の状況や考えを整理することができます。学校をより良くするため、継続すべきこと、改善すべきことをしっかり話し合い、教職員が協働して取り組むことを大切にして、生徒たちが笑顔で学校生活を過ごすためにどうすればよいのかを考え実践していきたいです。今の状態に満足せず、なぜという疑問をもち、生徒のために何ができるかを意識しながら、学校組織マネジメントとカリキュラム・マネジメントの視点をふまえ学校改革に取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

福井県立武生高等学校 島田 直子 (しまだ なおこ)

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコース(1年履修)で学ばせていただく島田直

子と申します。現在は福井県立武生高等学校に勤務しています。担当教科は理科(化学)です。

私が教職大学院のことを初めて知ったのは、福井大学大学院教育学研究科で学んでいた13年前です。

当時、私は2校目である福井県立足羽高等学校に勤務しており、初任校である福井県立藤島高等学校とのギャップに悩む日々でした。一番驚いたのは「どうせできんし（できないし）・・・」と言う生徒達がいることです。「生徒達に自信を持たせたい。そのために、まずは授業を変える！」と決心し、教育学研究科に進学しました。そこで、現玉川大学教授の石井恭子先生と出会い、ラウンドテーブルに誘われ参加するようになりました。この13年間、高校3年生の担任をしていた年度以外、年1回はラウンドテーブルに参加しています。人と語り合うことで、私だったらどうするだろうと考えさせられたり、私もそうだと共感したり、なるほどと新たな視点に気づかされたり。とても楽しく、頑張ろうと前向きな気持ちをもらえる貴重な時間だから、続けることができたのだろうと考えています。当時石井先生から夏期集中や冬期集中のこともお聞きし参加したいと思っていましたが、教職大学院生ではない私は参加できず、とても残念な思いをしていました。すると昨年履修していた県のマネジメント研修で、夏期集中や冬期集中に参加できると案内があり、すぐに履修を決めました。教職大学院では、様々な先生方や提示される資料や本から刺激を得る日々です。

今年度、武生高校は島田芳秀校長先生の「学校改革」という強い思いのもと、学校改革マネジメントチームとカリキュラムマネジメントチームが発足し、

その中のカリキュラムマネジメントチームの一人に任命されました。このチームでは、生徒が主語になるような学校運営のマネジメントを目的にして、教職員・生徒・保護者にはたらきかけをしていきます。今年度は、まず、学校教育目標にもある「自ら考え行動する生徒」を育むため、ノーチャイムの導入を考えています。このことについて生徒会と協議し、生徒に意見を聞くためアンケートを行う予定です。その際話題になった学校教育目標についても生徒達は興味を持ち、自分たちで教育目標について考えていきたいと意欲を見せています。

また、武生高校では、PTと呼ばれる先生方の研修会が定期的に行われており、教職員の先生方に話題を投げかけ考えていただく機会が当たり前のように設けられています。さらに、職員会議のあと、そこで出た話題を共有する時間もあります。この時間や研修会に生徒達にも参加してもらい、対話しながら改革を進めていければと思っています。

授業にも変化が求められています。高校にも観点別評価が導入され、「主体的に学習に取り組む態度」についてどのように評価基準を作成するのか、を工夫する必要があります。

4月から、教職大学院に一年履修という形で学ばせていただくことになりました。教職大学院での学びは、日々の仕事に追われている私にとって、大きな道しるべであり、大変ですがわくわくしています。

どうぞよろしくお願いいたします。

福井県立藤島高等学校 鈴木 聡史（すずき さとし）

今年度入学しました鈴木聡史です。昨年度から事前履修ということで、福井大学教職大学院にはお世話になってきました。今年度1年履修ということで学校改革マネジメントコースに在籍しております。

現在、福井県立藤島高等学校に在籍し、教科は理科で科目は物理を主に教えています。藤島高校は文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されており、科学技術系人材育成のためのカ

リキュラム開発等を行っています。校務分掌は図書・研究部に所属しており、主にSSHに関わる探究的な授業実践の企画・運営を行ったり、生徒が外部に研修に行くための渉外などを行ったりしています。

さて、気になってしまった方もいらっしゃると思いますが、自己紹介の写真は3月にビワイチ（自転車で琵琶湖一周）をしたときの写真です。こう見えて多趣味だと思っています。ロードバイク、DIY（Do It

Yourself)、バレーボール、料理、登山、SUP (Stand Up Paddleboard)、これまで気になったものに何でもかんでもチャレンジして楽しんできましたし、どれもそこそこにこなしてきました。自分で言うのも何ですが、器用な方かも知れません。DIY に関しては、自宅のウッドデッキや中庭・玄関の外構等々を手作りしました。ロードバイクに関しては、一昨年の6月に自宅(福井県鯖江市)から勤務先(福井県福井市文京)までの約20kmを自転車で通うことができれば健康のためにもガソリン省エネルギーにも良いよなーという思いつきからスタートしました。お試しで安いクロスバイク(ハンドルが真っすぐな自転車)を購入し、冬前まで50日くらい通勤することができたのですが、1日の通勤でガソリン代400円が節約できるという計算のもと、購入費用はだいたい回収できたと思っています。そうなってくると、もう少し良い自転車が欲しくなるわけで、今現在愛用しているロードバイクを昨年の2月に購入しました(数年かけて費用回収予定)。自転車通勤は試行錯誤の連続です。いかに速く、疲労を抑えつつ走り続けるのか。どのルートを選択すれば信号に引っかかることなく安全に早く学校にたどり着くことができるのか。インターネット上の情報や文献を調べ、知ったことをもとに実践し、振り返っては修正していくという過程を踏みます。そんなこんなで初めて自転車で通勤した頃(片道50分)よりもずいぶん早く(片道40分)楽に通勤することができるようになりました(朝は車通勤と所要時間が変わりません)。

最近感じることは、生きることは探究の連続であること。趣味一つ取ってみても探究なのです。昨年から福井大学教職大学院にお世話になり、カンファレ

ンスやラウンドテーブルに参加させていただいて、共に参加している皆さんの探究を見聞きできることは非常に尊いことだと実感しています。自らの実践に問いを立て、振り返り、皆さんの試行錯誤を参考にしながら、自らの実践に改善を試みつつ、新たに問いを立てていく。この過程の繰り返しがいかに重要で、価値あるものかを実感しています。

現在、高校においても探究の波が押し寄せています。本校はSSHとして生徒の探究活動のカリキュラムや手法の開発を手がけてきましたが、まだまだ発展途上で、探究の途中段階です。子どもたちが探究しているのに我々教員が探究しないでどうするのか。教職大学院で私が探究として進めていきたいことは自由に学び合う教員のコミュニティ作りです。昨年10月から藤島高校で「すずかけ AGORA」という自主的な学びの時空間を設定しています。集まりは月に1度目標、インターネット上での情報発信という形で実践しています。VUCAの時代を生き抜く子どもたちに何をどのように伝え、身に付けさせてあげることができるのか、問いは尽きません。私の当面の問い・課題はいかに「すずかけ AGORA」をより良い学びの集団にできるのか、活動を持続させ学校の文化として根付かせていくのかです。この探究活動の一端を皆さんと共有させていただくことで自らが新たな気づきを得て、皆さんから新たなヒントをもらい、より良い方向に進んでいけることを確信しています。

人生の探究活動はずっと続いていきますが、まずはこの1年の探究の一部分と一緒に省察していければと思っています。よろしくお願いします。

おおい町立本郷小学校 高橋 和代 (たかはし かずよ)

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコース(一年履修)に入学しました高橋和代と申します。(同姓同名の偉大な先輩がおられます。少しでも近づけるように頑張ります。)

今年度4月からおおい町立本郷小学校に勤務し、教務主任をしております。本郷小学校は、全校児童214名、教職員数18名、福井県の南西部に位置し、緑豊かな美しい山並み・青い穏やかな海など、美しく豊かな自然に囲まれた学校です。

私の教員生活を振り返ってみますと、目の前のことには一生懸命だけれど、ただただ突っ走ってきただけの毎日でした。教員生活のほとんどが中学校勤務。子育て真っ只中の時には、家庭と仕事との両立に悩んだ時期もありました。その時の悩みが、今教員として子供たちと関わる時に役立っていると感じることもあります。

私が教職大学院で学ぶきっかけとなったのは、福井県のマネジメント研修の受講です。そもそもなぜマネジメント研修を受講しようと思ったのか、それは私が壁にぶつかったことから始まります。

令和元年度（前任校の勤務5年目）、その時は職場に在籍年数の長い教職員が多く、普段のちょっとしたことを相談しやすい安心感のある環境でした。その安心感の中でただ突っ走っていた私に、大きな転換期が訪れました。それが令和2年度4月です。世の中では新型コロナウイルス感染症が拡大、そして人事異動により、在籍年数が長かった教員が勤務校から多数異動しました。

そんないつもと違う雰囲気の新学期、私は教務主任になりました。

教務主任1年目の私は、教育課程に伴う事務的な仕事を滞りなく行っただけで精一杯でした。前任の教務主任の、「組織をまとめる言動や働きかけ」などを思い出しながら教務主任として頑張ったつもりでしたが、感染症対策で教員同士もソーシャルディスタンスが求められたことや、毎日の消毒等で時間が大幅に取られ研修の時間が十分に取れなかったことも影響し、前年度までと比べて、教員同士のつながりに課題を感じました。教務主任として「このままでいい

のか」と葛藤していた私に、当時の校長が「時間割や授業時数など、教育課程について考えることだけが教務主任の仕事ではないよ」と、ご自身が教務主任だった頃の話をしてくださいました。その話を聞く中で、「もっと学校全体を見て動ける教務主任になりたい」「教務主任として教師同士をつなぐ役割を果たしたい」「全教職員が、もっとやりがいを持って働ける環境を作りたい」という強い思いを持ったことが、私に令和3年度にマネジメント研修の受講を決意させました。日々ただ突っ走ってきただけの私にとって、マネジメント研修はまさに「目から鱗が落ちる」学びであり、学ぶことの喜びを感じられた1年になりました。

マネジメント研修受講後、教職大学院での学びを続けるにあたっては、「私には無理だろう。出来っこない」と一步を踏み出せないでいました（実際、1年履修コース入学は1年遅れです）。

そんな私がなぜ入学を希望したか、それは「まだまだ学びを続けたい」と思ったからです。マネジメント研修で学ばせていただいた時間はとても充実し、学ぶことを通して新たな自分と向き合うことができました。大学院の先生方からのお話を聞き、多くの人と語り合い、自分の視野が広がったことも感じられました。偶然にも、ちょうどその時に勤務先に赴任してきた校長が教職大学院の終了生で、教職大学院での学びを生き生きとした表情で我々教員に語ってくださったことにも後押しされ、学びを続けることを決意しました。

今年度1年間、たくさんの先生方と出会わせていただくことに感謝し、様々な学びができたと思っています。みなさん、よろしくお願いいたします。

坂井市立三国南小学校 高橋 正晃（たかはし まさあき）

今年度、学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました、高橋正晃と申します。私はこれまで、本当にたくさんの方々に支えられてきました。今回、自己紹介ということですが、これまでの私自身の教

員生活をふり振り返りながら、私を支えてくださった方々を紹介したいと思います。

私は、平成8年4月、美浜町立美浜中学校に新採用教諭として赴任しました。私の教員人生のスター

トです。それまで講師も含め、教員としての経験が全くなかったのも、全てのことが初めてでした。技術科教員としての授業、学級担任、部活動顧問、どれも新鮮でしたが、当然のことながら同時に不安も感じていました。そのような時、私を支えてくれたのは周りの先輩の先生方でした。いろいろなことを教わり、そして育てていただきました。教員としての心構え、学習指導や学級経営、部活動指導など、本当に一から教えていただきました。さらには子供たちへの接し方、子供たちを思う気持ち、そして、教育に対する情熱・・・それらをアツク語ってくれました。また、同期の先生方とも時には励まし合い、時には競い合い、お酒を酌み交わしながら愚痴を言い合ったり慰め合ったり。そして、それがまた次の日からの活力になりました。ともに笑い、ともに泣き、そしてともに成長した「仲間」でした。子供たちのためにできることを一緒に考え、一人では越えることのできない壁をみんなで乗り越えようと努力する。私の教師としての原点は、間違いなくそこにありました。

また、仕事だけでなく、生活面でもたくさんの先生方に大変お世話になりました。当時は、坂井市の実家を離れて一人暮らしをしていたのですが、一人暮らしも初めての経験でした。先生方は、そんな私に本当によくしていただきました。食事に連れて行ってくれたり、自宅に呼んでごちそうをしてくれたり・・・。そのようなあたたかい環境のもとで3年間を過ごした「美浜」は、まさしく私の第2の故郷です。あっという間の3年間でした。でも、多くの方々に支えられ、多くのことを学んだ3年間でした。

その後、地元の坂井市内の学校に異動となり、中学校に10年間、その後、小学校に14年間勤務しました(今年は15年目です)。その間も、たくさんの方々に支えられてきました。まず中学校勤務では、「若手」から「中堅」と呼ばれる年代になり、技術科教育においては、福井県大会の代表授業者を任され

ることもありました。しかし、研究授業の準備がなかなかはかどらず、焦るだけの日々が続くこともありました。そんな時も周りの技術科の先生方、そして同校の先生方が力を貸してくださいました。そして、県大会の発表は見事大成功を収めました(私はそう思っています)。また部活動指導において、勝つための指導方法をいろいろな先生方から学んだのもこの時期でした。

初めて小学校に赴任した時は、これまた驚きでした。学習指導、学級経営、生活指導全てにおいて「小学校と中学校では、これほどまでに違うのか」と驚いたことを今でもはっきりと覚えています。中学校では技術科の授業しかしてこなかった自分が、全ての教科の授業をしなければならない、毎日の宿題を自分が考えて出さなければならない、空き時間がない!など、これまでとの大きな隔たりを目の当たりにして、まるで初任者のような気分でした。そんな時も、やっぱり多くの方が支えてくださいました。先生方だけではありません。たくさんの保護者の方のおかげでPTA活動が成り立っていると強く感じたのも、小学校教員になってからでした。

ここでは紹介しきれないほど、まだまだ他にもたくさんの方々に私は支えていただきました。もちろん、家族もずっと私を支えてくれています。今ふり返ってみても、本当に感謝の思いでいっぱいです。ただこれからは、これまで自分を支えていただいた分、その恩返しのため、今度は私が周りの先生方の支えになりたいと思います。自分が本当に誰かの支えになれるような力をこの教職大学院で身につけたいと思います。そのためには、教職大学院スタッフの諸先生方をはじめ、院生の先生方にもまたまた支えていただくことになると思います。こんな支えられてばかりの私ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

福井市至民中学校 秦 計代 (はた かずよ)

福井市至民中学校は、「福井市教育委員会特別研究指定校」「福井大学教職大学院拠点校」となっています。校舎は「教科センター方式」であり、「異学年型クラスター」を移転開校以来継続しています。また、「福井市通学区特認校」として福井市全域の校区外からも生徒を募集し、国内外からの視察を受け入れることもあります。他校にはない特色あふれる至民中学校は、保護者や地域の期待も大きく、それにふさわしい学校教育の充実を図りながら、学校教育目標「未来につながる学力の育成」を目指しています。

レッド	1－1	2－1	3－1
イエロー	1－2	2－2	3－2
ブルー	1－3	2－3	3－3
パープル	1－4	2－4	3－4

異学年型クラスター

至民中学校では、移転開校以来、「異学年型クラスター」を取り入れ、学校行事等を縦割り集団で活動しています。「クラスター」という言葉は、近年あまりよいイメージを持たれなくなってしまいましたが、至民中学校の生徒たちはとても大切に思っています。

クラスター集会では、クラスター長・副クラスター長を中心に活動します。先日の生徒総会では、クラスターごとに活発に話し合い活動が行われました。約100名の集団で話し合いが成立している姿には感心しました。これまでの活動の成果だと感じています。7月の合唱コンクール、9月の学校祭で、生徒たちがどんな姿を見せてくれるのか、非常に楽しみです。

学校教育目標「未来につながる学力の育成」のサブタイトルは、「未来に向け、一步一步着実に努力し続ける生徒」です。集団活動を大事にできる生徒たちには、自分だけの未来でなく、周りの人々や地域、社会のWell-beingを考えられるようになってほしいと願っています。そのために、未来に向かって生きていく生徒たちに必要な力は何なのか、未来の学校教育に必要なものは何なのか、教職大学院で学び考えていきたいと思っています。未来の至民中学校に必要なものが何かを見きわめられるよう、私自身も一步一步努力し続けていくつもりです。

子どもの学びと教師の学びは相似形と言われています。これまでの教職大学院の学びの中で、改めて「対話」の重要性を実感しています。業務改善と職員の力量向上の両面をねらった、「チーム学校」の実現を目指したいと考えています。学校は多種職で構成される組織体であることを忘れず、職種を超えて学び合い・協働できるように、また、様々な職種の教職員が役割としてのリーダーシップを発揮できるような仕組みづくりを進めたいと考えています。「一人職」と呼ばれる教諭以外の職員の力を生かす工夫も必要です。

教職大学院では、学校だけでなくいろいろな分野の組織マネジメントや先行事例を学び、OJTにつながる、至民中学校の組織づくりに生かしていきたいと思っています。

小浜市立小浜中学校 廣澤 喜教 (ひろさわ よしのり)

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました。現在小浜市立小浜中学校に勤務しています。教務主任で美術科を担当しています。昨年度はマネジメント研修を受講したことから、大学院での学び

に参加させていただきました。カンファレンスでは、職場で語り合うこととはまた違う多様な方との協働的な学びの楽しさを感じています。

新採用として勤務させていただいた中学校は大規模校で、教師としてのロールモデルとなる先輩方が多数おられる恵まれた環境でした。その後、実家のある小浜市に戻り、19年間中学校で勤務しています。2校目の勤務では、自立して学ぶ必要がありました。そのときになって、初任校では組織に守られている部分が多かったことに気づきました。どのような子どもに育てるべきか、また自分がどのような教師になるべきかを考えるようになりました。その後、転機となった場面はいくつかありますが、その中でも特に印象に残っている2つを紹介させていただくことで、自己紹介に換えさせていただきます。

1つ目の転機は、30歳を過ぎた頃に経験した全国道徳教育研究大会での発表でした。1年目はプレ発表として自作資料を用いて授業をデザインしました。2年目は名作「山寺のびわの実」という題材を用いて実践しました。授業者に立候補する先生がいなかったこともあり、2年とも授業者を務めさせていただきました。繰り返し先生方と対話を重ねて授業をつくった経験によって、道徳の授業に対する考えが洗練されました。そしてそれが学級経営や部活動経営にも繋がる貴重な学びとなったことを実感しています。それがきっかけで授業力も向上し、子どもたちが生き生きと活動する姿を目の当たりにする機会も増えました。また、それによって子どもたちの既存の力とその可能性の大きさを信じることができるようになりました。

2つ目の転機は、学年主任を勤めた時の出来事でした。ある日、校外学習で困っているのに周りに助けを求められないグループがありました。そのグル

ープがなかなか行動に移すことができずに、計画とは大きくかけ離れた活動しかできなかったことは予想外の出来事でした。学級担任を務めていた頃とは違い、この問題を客観的に見つめてみました。どの生徒にも共通して足りない力がないかと考えました。それ以来、職業学習として捉えていたキャリア学習を見つめ直し、子どもたちがより良い生き方を創造していくためのキャリア教育の必要性をより強く感じるようになりました。社会科学や社会实践に関する著書を意識的に読む機会を増やし、子どもたちを取り巻く社会を理解するように努めてきました。それをふまえて総合的な学習の時間を軸として、全教育活動を通して、子どもたちがよりよく生きていくために何ができるかを考えてきました。具体的には「子どもたちに探究的な学び方を身に付けさせること」や「多様な価値観を身に付けさせること」、「本物との出会いを通して学びの原動力となる感動体験をさせること」などを念頭において、カリキュラムデザインに進めてきました。

子どもの主体的な学びを醸成していくことは急務であると考えています。そのため子どもたちも教師も主体的かつ持続的に学べる環境をつくる必要があると考えています。私は運がよく、先輩の先生方に進むべき道を示していただくことができましたが、今後の教育を担う先生方にも新たなかたちで、学ぶ機会と場所を提供していくことが肝要であると考えています。連合教職大学院に関わる全ての方々、職場や家族から学びのための機会と時間をいただくことに感謝しながら1年間の学びを進めていきます。みなさんよろしくお祈りします。

坂井市立丸岡中学校 日芳 浩介（ひよし こうすけ）

「先生、最近キャラ変わりましたよね。」

昨年度、福井県のマネジメント研修を受講する機会をいただき、今年度は1年履修生として教職大学院で学ぶこととなりました。お恥ずかしい話ですが、私は研修といったものを避けて、これまでの教員人生を送ってきました。目の前の授業と学級と部活動

に全力を注ぐだけで、自分の実践を振り返ったり、新たなチャレンジをしたりすることはありませんでした。

両親が教員をしていたこともあり、漠然とではあります但中学生のころから教員になりたいという思いがありました。しかし、サッカーに明け暮れていた

私は勉強をおろそかにして、大学合格や教員採用試験の合格までに時間がかかり、新採用のときには30歳が目の前でした。念願の教員になれたことで「情熱だけは誰にも負けない」と全力で突き進んでいきました。平日は朝早く学校に行き、夜遅くまで残り、休日も部活動指導に時間を割きました。しかし、振り返ると、その熱意は子どものためというより、自己満足に過ぎないものであったと反省することばかりです。

昨年、丸岡中学校に赴任して6年目を迎え、2年生の学年主任を務めることになりました。初の学年主任をする上で大切にしようと思ったことが1つあります。それは学年部会の先生が笑顔で、この学年に所属できてよかったと感じながら日々を過ごせるようにすることです。教員の笑顔や和のある雰囲気は生徒にもつながると考えていたからです。しかし、1学期を終えて振り返ると、具体的な成果がほとんどありませんでした。学年主任として何ができるかという視点しかもてず、結果として何もできなかった自分がいました。

ここで私の転機が訪れました。それが、マネジメント研修の学びであり、事前履修生として参加した教職大学院の夏期集中講座での学びでした。多くの学びの中で最も重要だと考えたのは「対話」の必要性です。教師同士、子ども同士、教師と子ども、教育活動を進めていくには対話が欠かせません。子どもとの対話はもちろんですが、学年主任として、子どもを指導する先生方と対話する時間、機会を大事にしました。私が先頭を走るのではなく、先生方を信頼し、

任せられるところはどんどん任せつつ、時と場合に応じてアドバイザーになることを心がけました。

また、教務主任や生徒指導主事、研究主任との対話も意識しました。行事の内容や授業など前例踏襲の感が強い学校でしたが、新たな提案をしていきました。その結果、校則改正が生徒主体で進められ、多くのルールが見直されました。課題の出し方や補充学習のやり方が、一斉でなく個に応じたものとなりました。行事の下請け的な時間であった総合的な学習の時間は、探究的な学習活動に各学年がチャレンジしています。今年度は縦割り活動が総合や行事に導入されます。先進的な学校に比べれば、まだまだですが、確実に学校、そして教員が変わろうとしています。それが子どもたちの幸福感につながることを信じています。もちろん、これらは私だけの力で変わったわけではありませんが、多くの先生方と対話を重ね、新たなコミュニティをつくるきっかけをつくることができました。目の前しか見ていなかった私が少し先を見て発言や行動をしている…その過程で同僚から言われたのが冒頭の言葉です（笑）。

現在の学校現場は多忙です。私たち教員が学び合い、語り合う場や時間をつくることは容易ではありません。しかし、忙しい、時間がないと愚痴をこぼすだけでは何も変えていくことはできません。予測困難で正解がない現代だからこそ、学校内外での対話を大事にしたいです。そして「つなぎ役」としてリーダーの責任を果たしたいです。私個人が、学年部会というコミュニティが、そして学校全体が共に成長、発展できるよう、今後も自己研鑽に努めていきます。1年間どうぞよろしくお願いします。

福井県教育総合研究所 巻下 健太郎（まきした けんたろう）

今年度より学校改革マネジメントコースに1年履修生として入学しました巻下健太郎と申します。現在、福井県教育総合研究所に勤務し、主にICTに関する学校支援の業務を行っています。

ここに至るまでに、大阪の私立高校に10年余り勤務し、教員採用試験を経て故郷の福井に戻り、定時制高校に5年勤務した後、現在の職場での4年目が始まりました。ICTに関する業務を担当していますが元来は国語の教員であり、特段ICT機器が好きだった訳でも、得意だった訳でもありません。では何の因

果でこのような業務を4年も担当しているのかと言えば、定時制高校に勤務していた際に、ICT機器を活用した取組をしていたことに一因があるのではないかと感じています。

定時制高校に勤務していた頃はGIGAスクール構想前夜と言った時期で、目新しいことと言えば、年度の途中に教室にプロジェクターが設置された程度でした。もちろん一人一台端末など夢のまた夢でした。そんな中で、普段、向き合っている生徒たちが少しでも楽しく授業に参加できる手段がないかと考えた結果のICT活用でした。思いついたものの、端末がないので生徒は自分のスマートフォンを使い、自分もノリで買ってしまったiPadを使い手探りで様々なことに挑戦していきました。それと同時に、今とは違ってネット上に実践や活用のための情報が豊富にあるわけでもなくやればやるほどネタが尽きるという状態に陥りました。そこで、半ば必要に迫られて、学校の外に出かけて行くことにしました。県外の見ず知らずの人が開いているセミナーに参加したり、縁もゆかりもない学校の公開授業に参加したり、業者の人にメールをしてみたりと自分ができる範囲でやれそうなことはやってみました。

あまりそうは見られないのですが、基本的に人見知りで、他人と関わるのが得意ではない自分にとって最初の頃は知らない人と何かについて語るという営みが苦痛でしかありませんでした。しかし、人間は適応するということなのか、何回もあちこちに出かけていると、構えることなく自然に言葉が出てくるようになりました。後半は授業のネタ探し以上に、知らない人と何かを話すことが目的になっていた気がします。

昨年度、事前履修の中で多くの方と話す機会を得ることができました。何でも検索すれば情報が手に入ると思われがちな時代ですが、カンファレンスやラウンドテーブルで語られる内容は何でどうやって検索しても得ることができない貴重なものばかりでした。このことに気がついたとき、業務との兼ね合いや入学までの事務手続きの面倒くささ、知らない人の中に出ていく煩わしさなどが全て取るに足らないことだと感じました。そして、楽しいことが多そうだなということが入学を決める原動力となりました。

そんな私ですが、実は大学院への入学は二度目となります。大学の学部卒業後に前後期課程合わせて5年間、文学の研究と向き合ってきました。そこでの葛藤や経験、学びは今の自分の主要な構成要素となっています。しかし、個の力が試される場面も多く、また、地道な実証を積み重ねるという研究の性質上、他者との協働という経験はほとんどありませんでした。そんな過程を経て、今回、再び大学院という学びの場に加わることができました。しかも、今度は他者との関わり合いの中で省察を深める学びを進めるという新しい経験をつむことができることにワクワクしています。

これから始まる大学院での1年間を通して、多くの方々と出会い、想いを語り合い、働く場所は違えども良き同僚となれるように学びを深めていきたいと考えています。これまで、様々な場面で御一緒した皆様への感謝とこれから出会う全ての皆様、よろしく願いいたします。

福井県教育総合研究所 水澤 紀子 (みずさわ のりこ)

学校改革マネジメントコース1年の水澤紀子と申します。昨年度、事前履修で学び、今年度1年履修で入学をいたしました。

昨年度までは、小学校に勤務していましたが、4月より福井県教育総合研究所に勤務することになりました。主に初任者研修を担当しています。

昨年度は、夏休みや冬休みの集中講座やラウンドテーブルに参加させてもらいました。今までの自分

の実践を振り返ったり、先輩方の長期実践報告を読んだり、書物を読んだりと学び直しの良い機会を与えてもらったと感じております。何よりもグループで対話をしたことが自分の中で大きな学びになりました。オンラインでの参加の時は、他県の先生方とも話ことができ、その県独自の教育を知ることができたり、共通の悩みを話したりと画面上でしか会ったことがないのですが、まるで以前からの知り合いのような感覚になりました。これが、連合教職大学院の良さでもあるなと思いました。また、自分の学校での実践について語り、アドバイスをしてもらい、次へのステップにもなりました。

ところが、今年度は予想しなかった異動で学校現場から離れることになりました。今までやっていた仕事とは全く違い、環境も違い、戸惑うことばかりでした。4、5月は、慣れることに精一杯で自分がこれからどんな一年間にしていくかというプランも立てられず、また失敗することも多く落ち込むことも多かったです。しかし、月間カンファレンスやラウンドテーブルに参加させてもらい、対話することで視点を変えることができ気持ちが楽になりました。

幸運なことに、今所属している課にもう一人教職大学院生の方もいらっしゃいます。「この前の月間カンファレンスはどうかだった」とか「評価についてどう考えた」とか職場でもまた、話すことができている。

私はどちらかというとおしゃべりなので、この対話がとても楽しい時間だと思っています。話をすることは、自分の考えを言語化し、整理されて、気持ちがすごく楽になります。また、いろいろな年代、校種の人たちと話すことで新たな考えに出会うことができることも良さの一つだなと思います。

正直、昨年度は軽い気持ちで、あまり深く考えずに過ごしてしまいましたが、今年度は、毎回のカンファレンスがより良いものになるようにしっかり学んでいきたいと思っています。また、学んだことを少しでも仕事で返していきたいと思っています。

対面やオンライン、いろいろな方法で参加しようと思っています。たくさんの人に出会い、対話できることを楽しみにしています。みなさん、どうぞよろしくお願いします。

福井市社北小学校 水野 涼子 (みずの りょうこ)

今年度、学校改革マネジメントコース(1年履修)に入学しました。

この年齢での大学院入学というのは、理解不能なことなんでしょう。友人に「教職大学院に行く」と伝えたと、「え？あなたが？」と驚かれ、「あ、コーディネーター的な？」と言われます。それに対し「ううん、学生」と言うと、ほとんどの方が、とても驚きます。そして、「何で、今さら？」「何をしに？」と聞き「偉いわ～」と言います。

以前は、教職大学院へは“学び直し”に行くと思っていました。“学び直し”の意味も考えないままです。実際にお声がかかっても、『これ以上忙しくなるのはイヤ』『子供にお金がかかるのに』と思い、今ひとつその気になれませんでした。そして、教職大学院にわ

ざわざ行っている同僚を見て、私が今言われるように『偉いわ～』とっていました。

そんな私が、なぜまた、教職大学院に行ってみようと思ったのか。それは、昨年度夏のラウンドテーブルに久しぶりに参加したことがきっかけです。

令和3年度末に「これが本当に良かったのか？」と、自分に問うひとつの出来事がありました。校長として最初の年でした。たくさんアドバイスをもらい、自分自身も時間をかけて考え、これが良いだろうと決断したはずでした。事象としては学校運営のほんの一片。しかし、これまでの自分の学校運営がどうであったか、関わった人それぞれの思いや背景を考え始めると、わからなくなっていました。そんな時に、ラウンドテーブルの案内を目にし、以前に参加し

て得た感情を思い出しました。久しぶりの対面ということもありすぐに参加を決めました。自分自身を問い直したいと参加した実践報告会でしたが、その出来事の私の在り方の是非は結局わかりませんでした。そして、これからも答えは出そうにないなとも思いました。しかし、『語り合う』ことを通して、自分の取り組みについて見直すチャンスをいただきました。また、同じ時間と場所を共有した参加者の学ぶ意欲に「やる気」と「勇気」もいただきました。『語り合う』ことの楽しさや良さを改めて感じた私は、教職大学院への入学は、『今かな?』と感じ、今に至っています。

この春の定期異動で社北小学校に赴任しました。学校規模も子供や教職員の雰囲気もまるで違います。

当たり前のことですが、昨年度の通りにはいかず、立ち止まってばかりいます。立ち止まっている私と一緒に『語り合う』教職大学院の仲間は、受け止めて、支えてくれています。落ち込むこともあります。落ち込むことの方が多いかもかもしれません。それと・・・ちょっと疲れます。でも、刺激を受けたり安心したりしながら教職大学院での時間を過ごしています。

6月に入り、少しずつ課題が見えてきました。目の前の課題解決を通して学校づくりをしていくことは、改めて自分の教育観を見つめ直し、これからの学校づくりを考える機会をいただいています。『校長としてせねばならない』ではなく、クリティカルに『校長だからできること』を考えて実践していくつもりです。

南越前町立南越前中学校 山本 亮二 (やまもと りょうじ)

「VUCA (ブーカ) という言葉をご存じですか?」昨年度、初めて県のマネジメント研修を受講したときに、淵本先生がおっしゃっていた言葉であった。「鳥人ブブカなら知っているけれど、ブーカ???」当時の私は、恥ずかしながらも真面目にそのように思ったのである。その他にも、「ラーニングコンパス2030?」「コアメンバー?」「生徒エージェンシー???」などと、次から次へと出てくる新しいフレーズに圧倒されながら、私の心と脳は冷や汗のかきっぱなしであった。しかし、事前履修の中で、何度もカンファレンスを積み重ねたり、長期実践記録や理論書を読んでみたりすると、少しずつ言葉の意味するところが見えてきて、これからの社会に求められる全ての力につながっているのだと、おぼろげながら浮かんできた。そして、この過程が「面白い」とも感じたのである。もともと、社会科教員の典型ともいえる何でも知りたがり、新しい知識を欲しがりの自分の性格ともマッチングしたのかもしれない。是非、教職大学院に入学して、もっと学びを広げ、学び続ける教師になりたいと一念発起したのである。しかし、知識だけをつけて頭でっかちになったところで、教師としての成長はさほど望めるものでもない。

実践家として約20数年、現場で子どもたちと向き合ってきた私としては、この知識を現場で活かしてこそこの学びであると思った。タイミングのよいことに現在、本校(南越前中学校)は、3地区(南条、今庄、河野)が統合して、開校2年目の若い中学校である。県のマネジメント研修を受講した理由は、開校したばかりの学校をどのように改革し創り上げていくのか、そのためにスクールプランを受けて、先生方とどのような協働研究を行っていくのがよいのかを考えていくためであった。幸いなことに、マネジメント研修での学びが、教職大学院での学びとリンクしており、そこで学んだ理論を学校現場での実践に結びつけることができるのである。「これだ! 教職大学院での学びが、本校が求めているCOMPASSになる。そして、私が教職大学院と学校との橋渡し役になり、学んだことを基に本校のスクールプランの実現をコーディネートしていけばいいのだ。」自ずと教職大学院入学への決意は固まった。

教職大学院での学びの中で、本校の取り組みにすぐ取り入れたのが、『コミュニティ・オブ・プラクティス』で述べられている実践コミュニティの形成である。開校したばかりの本校では、学校を運営してい

くためのコミュニティづくりは急務であった。SWOT分析を受けて、学校の課題（弱み）を考え、それを解決するための目標と手立てを全教職員で考える。それと並行して、スクールプランを具現化するためには、どのようなコミュニティが必要かを話し合う。コミュニティを形成したら、定期的なカンファレンスを通して実践へと結びつけていく。現在は、理論から生み出された実践コミュニティという枠組みを使って、実践を行い振り返ることに取り組んでいる。すなわち、理論と実践の往還である。今後の目標としては、大きな変化やメンバーの交代が起きても、長期的な展望のもとで、進化・発展できる実践コミュニティを形成していくことである。その礎となるのが今年度であり、本校の研究目標である「学び続ける子ども」を育てるために、カンファレンスを通して教師たちも学び続けることで、その実現は図られると考える。現在、教職大学院の先生にもお越しいただき、全教職員による月間カンファレンスを定期的で開催している。多忙化解消、働き方改革が叫ばれる昨今において、定期的なカンファレンスは、障壁になるとお考えの

方もおられると思われるが、私は、そうではないと考えている。カンファレンスを通して、先生方が協働して、学校の目指すべきところ、子どもの学びをどのように作り上げていくのかを話し合うことは、チーム力の向上につながり、学校の様々な課題を乗り越える原動力になっていると感じる。そして、共有ビジョンを持った教職員集団で生徒支援を行うことにより、学校の実情に応じた開発的、予防的生徒指導につながり、結果的には働き方改革にもつながっているものとお考える。

最後に、教職大学院での1年間は短くとも、ここでの学びや先生方との熱い語り合いは、一生ものの財産だと思っています。教育理論にあまり触れてこなかった私が、この大学院での学びを通して、どれくらい成長でき、学校や子どもにどれくらい還元できるのかと考えるのも実は楽しみの1つです。このご縁を1回限りのものとせず、今後も広がり続けるコミュニティにしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

福井市岡保小学校 吉岡 高成（よしおか たかなり）

初めまして。私は教職大学院の学校改革マネジメントコースの1年履修で入学しました、吉岡高成と申します。また、同時に福井市の岡保小学校に勤務しています。現在は5年生のクラスを担当しており、子供たちの成長を見守りながら悪戦苦闘、試行錯誤の日々を過ごしています。

私は最初から教員を目指していたわけではありませんでした。むしろ、小学校、中学校、高校と、教員になろうという発想すらありませんでした。ただ勉強はするものだ、そういうものなのだと思います。勉強を続け、なんとなく進学していたのだと思います。高校2年生のとき、ふと、「自分はなぜ勉強をしているのだろう。何となく勉強を続け、何となく大学でまた4年間勉強をするのだろうか」と思ってしまった、そこから大きく方向転換をしました。その当時、自分が音楽やファッションに興味があったため、選

んだ道は服飾でした。そのまま、東京の文化服装学院に進み、卒業を控え、在学中に大きな結果を残すことができず、営業の線で就職活動をしていた際に、また、はたと立ち止まってしまいました。「この仕事を定年まで自分は続けられるのだろうか…」と。いろんな方に話を伺いながら、そこで初めて、仕事というものが日銭を稼ぐだけのものではないと考えるようになりました。周囲の中で、一番楽しそうで、一番やりがいのある仕事だと感じたのが教職だったのです。そこで、また、方向転換です。今度は教育学部のある大学を目指しました。教育学部があり、実家から通えて、学費も自分で払える大学という福井大学の一択です。しかし、受験勉強といっても、高校時代の蓄えなどありませんでしたから、一から勉強のやり直しです。辛くはありましたが、目的がはっきりしていたため、全ての勉強が、自分の目的にかなっていると思えば、乗り切ることができました。

教職に就いてからは、最初に勤めたのは、私立のかつやま子どもの村小学校、その後三国高校と丸岡高校の講師を経て、鯖江の東陽中学校、福井市の長橋小学校、中藤小学校と勤務し、現在の岡保小学校に至ります。紆余曲折、回り道もたくさんしましたが、校内でも自分よりも若手が多くなり、子どもたちも落ち着いている今が、自分のリスキリングの機会だと思い、教職大学院への入学を希望しました。

私の研究テーマは「学校現場におけるコミュニティづくり」です。学校は子供たちが知識を得る場だけでなく、共に学び合い、助け合い、絆を深める場でもあります。私は、学校内外の関係者と協力し、良好なコミュニティを築くことが教育の質を向上させる鍵だと信じています。

学校現場におけるコミュニティづくりには、様々な要素が関わってきます。私は、教員や生徒だけでな

く、保護者や地域の方々との密な連携を重視し、共通の目標に向かって取り組んでいます。コミュニティづくりには、信頼関係の構築、意見交換の場の提供、情報共有の活性化などが重要です。私は、これらの要素を通じて、学校内外の関係者がお互いを尊重し、支え合う温かい学び舎を作り上げたいと考えています。

教職大学院での学びは、私がこれまでの経験と知識を深める貴重な機会です。教育の最新のトレンドや研究成果を積極的に取り入れながら、実践的なアプローチを追求しています。また、大学院の仲間とのディスカッションや共同研究を通じて、多様な視点を得ることができ、自身の成長につながっています。皆さんと学びを深めるこの一年間、よろしくお願いします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

一歩、離れた視点から

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

大畑 颯人

教職大学院2年目の生活は昨年度から大きく変化した。昨年度は附属義務教育学校前期課程でインターンとしてだけでなく非常勤講師を兼務して1年間を過ごした。授業者として1年間を一言にまとめると言われると、「こんなにも私は授業ができないのか」という烙印を押された感覚である。授業の雰囲気はどうやって作るか、学びの導入・展開の仕方、協働とは？探究とは？自分なりに考え、教材研究をしてワクワクしながら学校には行くものの、授業では悪い

意味での想定外（話を聞かない、実験道具で遊びだす等）に苛まれたり、課題や議論が子どもたちに刺さっていない感覚が伝わってきたりと、「今日の授業は良かったな」と帰れたことは結局、一度もなかった。一方で講師生活にとっても充足感を得ていたことも事実である。同じ講師兼インターンだった先輩と悩みを共有したり、他の先生の授業を見たり、メンターとのOST（大畑相談タイム）での相談だったりを通して、0.1歩ずつ？ではあるが前進している感覚はあった。

そして何よりも子どもたちとの関わりが楽しく、上手くは行かないものの授業を楽しめるようになっていった。

講師生活の充足感の一方、私が大学院に入学した3つの理由のうちの1つである「研究活動」が全く進んでいないことが心残りだった。特に私の研究は東尋坊の岩石の研究であり、大学という研究施設だからこそできる、現場に出た後になかなか継続できないものであり、学生生活最後の1年間はこちらに費やしてみたい、心残りにしたくないという思いが強くなっていった。最終的に「研究活動のために講師を辞める」という私の我儘を様々な先生方に尊重していただき、附属義務教育学校後期課程でインターンという新たな環境での1年間がスタートした。今年度は、昨年度自分が授業者として直面した課題について他の先生方はどのようにクリアしているのか、参観者という一步引いた視点から考えていくつもりだ。春からまだ2カ月ほどしか経っていないが、「授業での全体共有の意味とは?」「授業での生徒の主体性とは?」など教科メンターとの話の中で、私の前に立ちふさがっていた壁が具体的な課題に変化してきているような気がしている。

これだけでも大きな変化ではあるのだが、もう1つ大きな変化がある。それが金曜午後にストレートマスターのカリキュラムとして設けられている「金曜カンファレンス」である。M1のときは基本的に参加者であったが、M2ではこれの運営を行うことになる。どんなカンファレンスにしたいか、どのように運営していくか、春休みだけでも3時間以上の会議を10回以上重ねてきた。今年度のM2は良くも悪くも1人1人の思いが強いため、その思いを擦り合わせていくのにとっても時間がかかった。その中でも今年のM2の全体認識である「“わからない”を取り残さない」雰囲気づくりを大切に和気藹々と会議は進んできたと思う。

ただ実際に金曜カンファレンスが始めると、その和気藹々とした雰囲気が一変した。“わからない”に向き合うあまり増えていく決定事項、次週までに決めなきゃいけないという義務感、互いの思いを擦り合わせられないことによるすれ違い…。

その会議の中で、今「私は会議の中でどうすればいいのか」いつも考えさせられている。私はリーダー経験が多く、集団と関わる際に“リーダー的役割”として関わるが多かった。ただ、その中では「大畑の意見を出し、周りに認めてもらう」ような状況になることが多く、いわゆるワンマンチーム感があつたように思う。しかし、金曜カンファレンスの運営はリーダーを据え置くことはない。M2全体で合意形成を図りながら活動を作っていく。…その中で自分がリーダー以外の立場でどのように集団と関わっていけばいいのか、自分の立場というものを見失いつつある。

そのように自分の立場を見直していく中で自分の思考の傾向が見えてきたような気がしている。目の前の課題解決ではなく、長期的な視点からの利点・欠点を見据えること、全体がM1の学びに対して全力で考えている時に自分たちM2の学びについても考えていることなど、周りよりも問題を複雑化させ長期的な視点で見ることに癖づいているように思う。その思考のズレをどうやって周りに伝えるか、膨れ上がった会議の中でそもそも伝えるべきなのか…合意形成の過程の中でズレを感じる自分の意見とどう向き合いか日々悩み続けている。

中学校1年生の頃から3期連続で学級長を務めた後、4期目で学級長になれなかった。その時に担任から「あなたは一旦リーダーから離れた視点から周りを見たほうがいいのかも」しれない」と声をかけられたことを今でも覚えている。その時はその言葉の意味がわからなかったが、一步離れた今、ついにその言葉の意味を考えるべき時がきたのかもかもしれない。

子どもたちが学級を作る

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市中藤小学校 中村 七海

私は昨年に引き続き、福井市中藤小学校でインターンシップを行っています。配属学年は、昨年度は 6 年生でしたが、今年は 5 年生になりました。メンター教員は昨年度と同じ先生のもとで勉強させていただいています。

昨年度は障害理解に興味を持ち、勉強をしていました。しかし、特別支援について勉強すればするほど私自身が「障害」にこだわっていたことに気が付きました。昨年配属された 6 年生の学級は特性を持った児童がとても多かったです。しかし、その特性も含めて「〇〇ちゃん」「〇〇くん」として受け入れ、学級の一員として相互に関わり合う姿を目の当たりにし、本当の障害理解のあり方を児童たちから学びました。今年は、メンター教員が、クラス替えをした 5 年生の学級においてこのようなインクルーシブな学級を作るためにどのように学級経営をしていくのかを勉強したいと考えています。始業式から 3 カ月、メンター教員の手によってみるみるうちに変わっていく児童の様子を間近で見させていただき、日々刺激をもらっています。

教員がどのような働きかけをすれば、「児童が生き生きと生活ができる学級」を作ることができるのかを探るため、メンター教員が学級経営に関わる指導をした際にはメンター教員の言葉と児童の様子を取りこぼすことなく記録に取ることを意識しています。また、その指導場面を分類し、分析することでどのような指導を行えばどのような学級ができていくのかを理論化したいと考えています。そのような指導場面を観察していく中で、私はメンター教員の「待つ」という指導技術が自分には足りないと感じます。「このまま行けば失敗してしまう」と思った時にもメンター教員は必ず待ちます。全てが終わった後に何が悪かったのかを児童と振り返ります。この「待つ」という動作が児童を育てるということが最近わかり

ました。どうしても途中で口をはさみたくなってしまうのですが、あえて「待つ」ことができるような心の余裕と指導の技術を自分自身も身につけたいです。

また、私がとても大切にしているのはメンター教員との会話です。私は「答え合わせ」と呼んでいますが、自分が見取った児童の様子や学級の様子をメンター教員に伝えると、メンター教員から見た児童の様子や学級の様子を伝えてくださいます。それが一致していた時には自分の感覚が正しいと自信を持つことができます。しかし、まだまだ一致することは少なく、メンター教員の「人を見る目」には日々感動します。この時間が私にとってはかけがえのない大切な時間で何よりも勉強になります。

授業実践では、毎週一時間、算数の授業をさせていただいています。昨年度 6 年生で授業をした際には基本的な児童とのやり取りができていないことが課題でした。自分が言ったことが児童に伝わっていなければ、どれだけ工夫をした授業を考えたとしても意味がありません。そこで今年は工夫した授業ではなく、基本的な児童とのやり取りを大切に授業実践を心掛けています。「教科書〇ページ開いて、〇番を読みましょう」と二つのことを同時に伝えるのではなく、「教科書〇ページを開きましょう」と伝え、開いたことを確認して次の声掛けに移ります。そのようなことを心掛けながら授業をしていく中で、だんだんと児童がどのくらい理解しているのかも自分の中で分かるようになってきました。自分と児童のやり取りができるようになってきた現在は、児童の発言に対して私が「どういうこと？」と深めるのではなく、児童同士で「どういうこと？」という声がたくさんあがり、児童同士のやり取りを楽しんでもらうことを課題としています。学級だけでなく、授業も児童自身で作っていきけるような働きかけができる授業をしていきたいです。

学会や研究会に参加させていただくなど、昨年は出来なかった経験をたくさんさせていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

学級は自分たちで作っていくもので、そこに集団で過ごす楽しさが隠されています。それをどのよう

な形で児童に伝えていくのかは教師の力量だと考えます。その技を残された大学院生活の中でたくさん盗み、現場に出たら実践できるように準備をしたいと思います。そして、子どもたちとのかかわりを心から楽しみたいと思います。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

2年目の活動

ミドルリーダー養成コース2年/福井佼成幼稚園 荒 通雄

今年度が始まり早くも3ヶ月が経過した。私は昨年4歳児担任兼主任の立場から、5歳児担任兼主任となった。5歳児は幼稚園生活最後の年、小学校に向かうための大事な年である。そのため様々な活動、行事、この一年で育てほしい力等を子どもたちと一緒に探求していくことになる。そのためにも幼児期に必要な学びの場『あそび』をより充実させていくことは大前提である。

4歳児では草花や飼育、絵具遊びやピタゴラ装置づくりなどで盛り上がった。5歳児では同じものが流行っていくかと考え、作り上げていったものをそのまま保管していた。ところが、新たな遊びが子どもたちの中で芽生えていた。4月当初から紙飛行機を折っては飛ばすことが流行っていた。同じ折り方を子どもたちで共有し合い飛ばす。ふんわり飛ぶ、まっすぐ飛ぶ、曲がりながら飛ぶ、急降下していく、飛行機の動きに注目しながら楽しむ。友だちの飛ばす様子を見てどうやったらこんなに飛ぶのだろうと関心を持つ子どもたちは投げ方を教わる姿もあった。折り方や飛ばし方を教え合うことで新しい友だち同士の仲も深まっていたように今感じる。

ICT教育でiPadを使用している。そのiPadで自分たちの調べものをする環境も提供している。紙飛行機について調べ、動画をみながら新しい折り方を習得している。様々な紙飛行機を折っては飛ばして動画のようによく飛ぶかを検証する。また紙飛行機をお店屋さんごっこの商品にして他の学年に売ってみたいと発展（現時点では停滞中）。今は、飛ばすことを存分に楽しみ今後の活動や行事の中にも取り入れていくこともイメージしながら柔軟に対応していきたい。まずは私自身も子どもたちと一緒に楽しみたい。

今年度で大学院2年目を迎える。昨年度、大学院ではコミュニティについて学び、コミュニティの場があることで学校や職場が活気づく報告をよく耳にしてきた。そのため職場でもコミュニティの場を設けようと、男性保育者（ミドルリーダー養成コース修了者）と二人で今年度から作り上げた。その名も「放課後ティータイム」。

仕事について話し合い、悩みや相談ごとをテーマとして語り合い、深めていくことでより楽しみながら子どもと触れ合っていくことをねらいとする。仕事後の30分間、お菓子やジュースを囲んで気軽に

話合える場を設けてみた。月に2回、不定期だが複数人の先生方に参加してもらっている。初回はこちらでテーマを絞り、「子どもたちの遊び」について私たちの思いを語った。子どもたちと同様に関心や疑問を抱きながら遊んでみることに、子どもたちと一緒に正解を導きだしていくことなど、まずはやってみてそれから一緒に考えていく。正解・不正解は子どもたちが決めていくことを語った。2回目以降からは先生方の声を聴かせてもらった。「疲れた」「毎日大変」「気がかりな子どもたちへの対応」「声を掛けるタイミング」など多くの声が上がった。進級当初はどの保育室も子どもたち一人ひとりを把握することが大変であることが共有され、私自身も共感し何となく安心した。そして、6月ごろには子どもたちも安心して過ごせるように「今」を大切にしていこうと、以前の

クラス担任と遊びなど共有していくことを話し合うことができた。

普段、職員室で笑い声があり、仕事を共有している様子を見ているが、細かな不安や悩みを言える場がないことに気づかされた。悩みを毎日抱えながら過ごしていくことは保育者にとっても子どもにとっても良くない。悩みや課題、そして取り組んでいることなどが共有され、共感されることで安心感が得られる。そして、ほんの少し自分を客観的に見ることが出来、肩の力を抜いて子どもたちと「楽しい」「明日はこんなことしてみたい！」と前向きに関われるような気がしている。そのような取り組みをして、園全体で盛り上がっていききたい。

令和5年度の取り組み

ミドルリーダー養成コース2年/高浜町立高浜小学校 今井 悠介

昨年度は6年生担任として総合的な学習の時間に「コドモノ明日研究所」の活動に1年間をかけて取り組んだ。「2040年に高浜町がなくなるかもしれない」という人口減少問題に歯止めをかけるため、地域団体(高濱明日研究所)と協働して課題探究的な学びを進め、レモンゼリーとコースターの紫蘇染めの商品化を実現させた。この探究活動では、①教職大学院長期実践報告や他の書籍から大きなヒントを得て探究活動を展開してきたこと、②年間を通じて探究活動を展開してきたこと、③地域の団体「高濱明日研究所」と協働しながら実践したこと、④「表現の場」を意識的に設定して子どもたちが他者意識を強く持つて自分の考えを表現することによって力をつけたこと、⑤1年限りの活動ではなく6年生が卒業しても活動が続いていくサステナブルな活動につながれたこと(前年度商品化したレモンゼリーとコースターの紫蘇染めを、翌年度の5・6年生がブラッシュアップをかけて引き続き商品として販売していくこと)などの成果を得ることができた。十分とは言えな

い探究活動ではあった。しかし、その過程や成果・課題を踏まえて、令和5年度も探究活動を推進していきたいと考えている。

今年度は4年生の担任になり、合わせて生徒指導主事としての役割もいただいた。責任とやりがいを感じながらも、初めてばかりの役割に戸惑いながら、令和5年度のスタートを切った。担任を受け持つ4年生は課題を抱えた子どもが多い。新年度が始まってすぐに様々なトラブルが続き、その火消しに追われる毎日が続いた。さらに、昨年度と今年度の活動をどうつなげればよいか、昨年度の自分自身の学びをどう生かして実践を展開していけばよいかという明確な方向性が見えないまま、とても不安な4月を過ごした。そのような中、4月22日(土)と23日(日)に4月合同カンファレンスに参加し、グループの方から「探究活動を実践していく意義は非常に大きいので、昨年度に自分自身が展開した実践や学びを、4年生の総合学習で生かしていけばよいのではないか。それが子ども達の達成感・満足感を醸成することに

つながり、結果として子どもたちの生徒指導上の様々な問題の未然防止につながる。積極的な生徒指導を行っていくとよいのでは。」という意見をいただいた。セッションの中で多くのヒントを得て、4年生での探究活動のアイデアも生まれた。4年生の総合的な学習の時間には、「地域の高齢者・障がい者福祉」について地域の現状や課題について知り、まとめ報告する計画となっている。しかし、これにこだわることなく、子どもたちの求めに沿った探究活動を展開していくことこそ大切なのではないかと考えるようになった。結果的に、福祉につながればさらによいと考えた。4年生は比較的時間の余裕も生まれるし融通もきく。1年間でおもしろいことに挑戦できるのではないかという考えに至った。

探究活動の初めには、子どもたちに「計画はまだ何もないので、みんなが興味のあることを研究していこう」と投げかけ、まずは前年度に策定した新高小SDGsをもとにアイデアを出す活動を行った。

「2040年に高浜町がなくなってしまうかもしれない、そうならないために高浜町を魅力的な町にしよう」という大枠を外さないように話をし、「自分にはどんな活動ができるか、どんな活動をしていきたいか」を自由に出させた。4年生なりに身の回りの課題を見つけていく中で、海のごみを拾って役立つものに再利用するという意見が多く出た。そして、活動を展開していくために、ごみがどのような方法でリサイクルされているか、同じような活動をしている人はいないかなど、調べ学習を進めた。

5月30日は、「ご(5)み(3)ゼロ(0)の日」である。ごみ問題に関して、ちょうどこの日に子どもたちに話した。「今から行きましょう!」というやる気に満ち溢れた返事が返ってきて、ごみ拾いを楽しみにしていることを感じ取ることができた。そして翌日、学校近くの「鳥居浜海岸」に出かけてごみ拾いを行った。ペットボトル、空き缶、たばこの吸い殻、ガラス、ビニール袋、ロープ、浮き…。様々なごみを拾う姿からは、子どもたちのやる気が感じられた。子どもたちは満足そうな様子で帰校した。自分たちで課題を発見し、活動を決めていく。学校から出て、町や自然の中

で体を動かしたり肌で感じたりしながら学習を進める。そして学校に戻って次の課題を探るという探究のサイクルは、子どもたちのやる気を引き出し、深い学びにつながる。

ごみ拾いに意欲的に取り組んだ子どもたち。しかし、とりあえずごみ拾いはしたものの、次の活動展開をどうしていくのか方向性が見えないまま、私自身が足踏みして数日が過ぎた。そんな時、昨年度の6年生のコードモノアスケンの活動で関わっていただいたアスケンの方々に「4年生は、浜のごみ拾いに行きます」ということを伝えたところ、アスケンメンバーの1人から、「4年生が『たからのはまプロジェクト』に関して何かできればいいね」と提案していただいた。「たからのはまプロジェクト」とは、何ひとつとして捨てない海を目指して、ビーチのごみを別のものに生まれ変わらせるというアスケンの取り組みの1つである。その第一歩として、ビーチクリーン活動で拾ったペットボトルを繊維に再生させ、その再生繊維でライフジャケットを製造する取り組みを始めている。今後は、ライフジャケットを高浜のビーチに設置し、海水浴客に安全な海を提供しながらプラスチックごみの存在を知ってもらうきっかけにしていこう予定だそうだ。この活動は、4年生が取り組みたいと考えている内容にマッチしていると考えた。今後、様々な団体と協力して、町内外の方々が高浜町の海に関わる中で、海を守る仲間を増やしていくことなどを計画していると聞き、ぜひ高浜小4年生も仲間に入れていただきたいと考えている。

私の中で、次の展開をどうするかが少し行き詰っていた時に、タイミングよくお話をいただき幸運だった。これまで一緒に活動し、関係を築いてきたことが次の学びにつながる。外部との連携、地域との協働を継続してきたことが功を奏し、方向性が見えた。一教員や学校内だけでの活動には限界がある。開かれた学校、発信する学校にこそ地域の方からの支援が得られるチャンスが巡ってくる。このチャンスを活かし、今後も探究的な活動を進めていきたいと思う。

新しい同僚たちとの旅の始まり

ミドルリーダー養成コース2年/足立区立東綾瀬中学校 矢成 清美

令和元年5月から4年間勤務した江東区立深川第二中学校では、約300名の生徒とともに、美術の授業や道徳を通じて、美術の知識のみならず、基本的な生活習慣を身につける重要性や身だしなみ、他者との協働、さまざまな職業とその就労の意義などに重点を置き指導してきた。結果、仮校舎移転記念行事「思い出プロジェクト(思P)」を全校生徒で成功に導いた。また顧問をしていた美術部は別名「労働部」と呼ばれ、校内の装飾、展示、清掃、移転の荷造りなどを42名の部員が一手に引き受けていた。彼らは労働によって「人から喜ばれる」ことを自らの喜びと思える稀有な集団である。また、別室登校の生徒をカウンセラーや担任の先生方に紹介していただき、美術の課題のフォローをしながら寄り添い、彼らの話に耳を傾けた。美術室を解放し、給食指導、校内装飾の作業を通じて彼らの居場所作りに奔走する。その後「別室登校」という仕組みがなくなり、不登校の生徒は自宅からリモート授業に参加するという体制となる。画面越しではあるが、繰り返し「授業の見通し」や「あなたは、決して1人ではない」ことを伝え続けた。ある生徒はその後、登校を再開する。おぼろげながら自分の役割を感じた瞬間であった。さらに教職における専門性を高めたいと考え、令和4年4月より福井大学教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学し、「生徒の見取り」「同僚性」や「探究型授業」「コアグループの形成」など初めて耳にする言葉に出会う。最初は戸惑ったが、大学院で出会った先生方とのセッションの中で次々と深い学びを発見する。

令和5年4月より、かねてから希望していた足立区立東綾瀬中学校特別支援学級8組担任としてスタートした新学期は、胸躍る喜びと嬉しさに満ちていた。まずは個性豊かな生徒たちの中から、私が担当している1人の生徒を紹介したい。私達のファーストコンタクトは教室内の「かくれんぼ」であった。「ワ

タシがかくれるから、やなりせんせいが、じゅう、かぞえてください」と言う教室のカーテンの裏側に隠れ、「もーいーかい、もーいーよー」と大きな声が聞こえてくる。体はカーテンからはみ出しているし、私との距離は数メートルだろうか。私は楽しくて大きな声で笑う。すると茶目っ気のある笑顔でこう言われるのだ。「みつかったちゃった？」また、別の場面では、楽器が上手く弾けず落ち込んで泣き続けるその生徒にそっと寄り添い「音楽の授業、できますか？できませんか？」と聞くと「おんがくのじゅぎょう、できます」と涙ながらに答え、必死に楽器を演奏する。温かく見守ると次第に泣き止み「ないてごめんなさい、おんがく、ちゃんとやります」と自分の気持ちを伝えてくれる。そして極めつけは、先生方に小さなイタズラを仕掛けてくるのがなんとも愛らしい。職員室のガラス越しに覗き込んで「いないいいない、ばあー」ではなく「いないいいない、がおー」とやってみたり、私の腕時計のバックルを素早く外そうとしたり。もちろん度を越えた時は、なぜやってはいけないか丁寧に説明する。一度では理解できない場合もあるので、繰り返しじっくりとお話をしている。今ではイタズラをする前に私と目が合えば止める、など抑止がきくようになった。私はすかさず親指でgoodのサインを出して褒めるようにしている。このように日々、成長を感じることができる。

そして新しい担任団についてもご紹介したい。私を含め6人で32名を担当している。4月から数えてまだ数ヶ月しか経っていないが、非常に高い同僚性を感じることができる。32名の生徒達はみな知的障害を持ち、中には身体的に難病を抱えている子もいる。そればかりか、複雑な家庭環境を背景に持つ子も少なくない。それぞれの事情を把握し、状況の変化やトラブルに対応するために8組の職員室のホワイトボードには担任らが最新の生徒情報を書き込み、毎

朝共有する。これらの情報から、その日落ち着かない生徒がいれば担任らがさまざまなアプローチを仕掛け、教室内の安全を保つよう心がけている。私達の会話は常に生徒とその保護者への配慮について、であるため、自然と一枚岩となったのであろう。

このような恵まれた環境に感謝している。そして長期実践報告書のテーマは「特別支援学級における総合的な学習の時間」と決めた。素晴らしい同僚たちと協働の精神を培って、探究していきたい。

学校に携わる誰もが、心地よく協働することができる環境に

学校改革マネジメントコース2年/美浜町立美浜東小学校 一瀬 憲幸

学校に携わる教員・地域・行政の方々が心のゆとりをもって心地よく活動し、更に連携と協働が深まる方策を理論として学び、現場で実践し、地域に貢献することを目的として課題を設定し、ここ教職大学院に入学させていただき約1年が経過した。小学校、中学校という学校現場、教育委員会という教育行政現場。ありがたいことにどちらの現場も経験させていただき感じたことが、課題設定の大きな理由になっている。

社会の変容が大きくなる中で、学校の教師には「常に学び続ける教師」であり続けることが求められている。そのためには、巷ではブラックな職場という認識が急激に高まっている（最近、村の寄合などで様々な年代の方と話をするときにも、先生の仕事ってブラックなんやろ？と言われる機会がかなり増えている…）学校現場での日々の業務をこなしながら、さらに学び続けるための「環境」が欠かせない。果たして今のそれぞれの学校現場には、学び続けることができるための環境が十分に整っていると言えるだろうか。教育行政の現場には、学校を指導監督しながらその環境を整えるサポートを行う余力があるのだろうか。今の自分自身の立場から、何ができるのだろうか…そんなことを自問自答しながら、学校に携わる誰もが、心地よく連携・協働することができる環境の構築を目指し、このコースで学ばせていただいている。

今の自身の立場は、一担任であり、管理職ではない。ただ、これまで素敵な管理職のもとで仕事に従事

し、本当に自由にものを言わせていただいたり、行動させていただいたりしてきたので、今後、学校現場で職員の皆さんの環境を整える立場になっていきたい、いかなければいけないと考えている。これまで、「学び」よりも「情熱と勢い」で業務をこなしてきた私にとって、先生方の学ぶ環境をサポートしながら、これからの学校をマネジメントしていくためには、自分自身が「更に常に学び続ける」ことが必要であると考えようになった。今回の研究を通して一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境を構築する一端を担っていったらという思いが課題の根幹になっている。私は学校教育に携わり、よりよい社会創りに貢献したいという志をもって教師になった。その初志を更に膨らませ、全教職員の理解者、伴走者になり、赴任した学校を支え、地域、家庭との協働を大切にし、社会に貢献するという大志をもって今後も研鑽を重ねたいと考えている。

ここ教職大学院は、参画する多様な方々、現場の先生方との「対話」を何よりも大切にしている。すでに学校をマネジメントされている方々、私同様これから考えている同じコースの方々との対話はもちろんだが、全国各地の様々な方々、様々な年代の方々の考えられていることや実践をお聞きしたり、自分自身の実践や思いに対して意見をいただいたりするのが何よりの魅力である。学校現場でフルに従事しながら、院生として週末の時間を過ごすことは、正直にいうと、体力・気力共に厳しい時もある。ただ、不思議なことにカンファレンスを終えた後には、「勇

気や希望」のようなものが心の中で芽生えていくことが多いのも事実である。

教職大学院に参画する多様な方との出会いの中で、これまで私自身が出会い、影響を与えてくださった方々への思いや、自身の実践を振り返り、現在の状況に合致すると考える実践をスタートすることができた。それは「緩くつながるコミュニティの確立」である。学校内のコミュニティとしてのミニワークショップ、そして、小さな町の3つの学校をデータや簡易で密な連絡によってつないでいけるような試み、この2つを実践として始動した。この2つは業務改善にもつなげていきたいと考えている。2年目となっ

た今でも、常に試行錯誤の段階だが、連携・協働しながら学び続けることのできる環境の構築へ、自分自身ができることをすすめていきたい。

院生としての活動は、あと約10か月であるが、私の教職生活はまだ15年ほど残っている（はずである…）。教職大学院での学びを糧とし、その後の教職生活でも引き続き、対話と省察を大事にしながら実践を進めていく所存である。「お父さんは楽しそうに仕事をしている」と言ってくれて、また、関わってくださった素晴らしい先生方との出会いを経て、教職の道を志している我が愛する息子の為にも、もうひと踏ん張り、前に進んでいきたい。

ほんの小さな一歩

学校改革マネジメントコース2年/勝山市立三室小学校 酒井 範子

教職大学院に入学して、2年目に入った。教職大学院の環境にも慣れ、会えば近況を報告し合う仲間もできた。校種の違う先生方やファシリテーターの先生からいただく言葉は、明日へのエネルギーになっている。

充実した教職大学院での学びとは裏腹に、自分は、学校のために、同僚のために、何かできているか？と考えると気分が落ち込む。「修了まで、まだある、まだある、日はまだある」と感じていた昨年度とは違い、「どうしよ、どうしよ、2年目だよ」と修了までの短さが焦りに変わる。ほんの小さな一歩前進を思い描きながら、学校のために、子どもたちのために動かないといけないと分かっているながら、できていない現実と常に向き合っている。そんな中、先日学校で起きた「ちょっといい話」を以下に記す。

本校は、全校児童33人の小さな学校である。今年度は、3、4・5、6年が複式学級という構成になった。新しい先生方を迎え、校長が全先生方をお願いしたことは、子どもたちを主語にした学びへの転換である。6月中旬には、授業を通して、研究の途中経過をたくさんの先生方に観ていただかなければならな

い。だから、子どもたちが自分で学びを進められる方法を研究していかなければならなかった。ただ、私たちは複式学級を抱える学校といっても、現教員は複式授業の経験が大変浅く、どのように授業をデザインしていけばいいのか分からなかった。「確実に成長する方法があるのであれば、どなたか教えてください」とお願いしたいぐらい、職員一同、自分たちの進めている研究方法に不安があった。へき地複式校が作成する研究冊子を読んだり、他校に直接教えていただけないかと尋ねたりもした。実際、指導案を検討したものの子どもたちが主体的に動く様子がイメージできず、みんなでモヤモヤした。すると、「このまま検討しているより、模擬授業をした方がいいのでは」という意見が出された。そして、いざ模擬授業をやると、2学年をわたる教師の動きがしっくりこないということになり、「単学年ずつの模擬授業にしよう」

「私この単元、単学級の研究授業でやったことがある」「ベテランの先生の師範授業も入れよう」と研究内容がより具体的になっていった。同時に、毎日の放課後は、子どもたちの主体的な学びの姿に注目して、担任と研究主任と管理職とで進捗状況を確認しあった。

子どもたちだけで進めていく授業を積み重ねていくうちに効果は表れた。子どもたちは、確実に授業を進める言葉を持つようになった。「子どもの学びと教師の学びは相似形」という理論にふさわしいかどうかは分からないが、力を伸ばしていく子どもたちの傍で、なんと、教師の「わたり方」も進歩していった。これには、感動した。道草しながら、ときには迷いながら研究が進められていったように感じるが、何とかして、みんなで知恵を出し合い、歩き続けたことが実を結び始めたのだ。

そのように、学校中の教職員で取り組む毎日を過ごしながら、授業公開当日を迎えた。全校の子どもたちの数に迫る参観者の数に、子どもたちも私たちも圧倒された。それでも、子どもたちは、自分たちで学び進める授業スタイルを崩さず、意欲的に学んだ。4

5分間学びを止めることなく、楽しそうに協働して学んでいた。

課題はあった。それでも、本校の先生方からは、充実感が見て取れた。若い授業者も「緊張でお腹が痛い」と授業前の表情は硬かったが、授業後の晴れやかな顔は、やり遂げた達成感にあふれていた。どうしてここまでみんなの顔が晴れやかなのか。その答えは「協働」に尽きると思っている。手探りの中で進めてきた研究は、少しずつ形を成していった。それぞれの先生が自分の技術や考えを共有し合い、みんなで1つの授業を作り上げていった。私たちは、確かに「協働」していた。授業研究を通して「協働」できたことは、「私たちにもできる」という自信となり、本校にとっての小さな一歩になった。この後も引き続き、協働的に学びあう集団として、成長していきたい。

対話でつくるコミュニティ

学校改革マネジメントコース2年/福井県教育総合研究所 三上 勝

4月から福井大学教職大学院での学びがスタートしました。開講式と4月、5月のカンファレンスを受けて、私の中でキーワードとなっているのが「対話」です。

「今年度は定期的に課会を開きます。」

この課長の一言から今年度の教育総合研究所での業務がスタートしました。私は、教職研修センター内の教員研修課に所属し、課長と5名の所員の計6名で、基本研修や職務研修の企画や運営の業務にあたっています。課会では、教師の「主体的・対話的で深い学び」を支える研修になるためにはどのように研修を運営すればよいかをテーマに話し合っています。

4～6月は、若手教員研修の授業実践研究でのグループ協議の進め方やグループ協議の評価、ファシリテーターの役割などについて話し合いました。グループ協議は、受講者が記録してきたレポートをもとに話し合う形態で行います。受講者がグループでの対話を通して自分の学びを深めることができるよ

うに、グループ協議の流れやファシリテーターに周知することなどについて、所員がこれまでの自分の経験をもとにさまざまな意見や考えを述べあいました。

私は、課会での対話が大好きです。課会では、自分の経験をもとにして考えを述べることができます。このことで自分のこれまでの現場での実践を思いだし、振り返ることができます。また、他の所員の考えを聞くことで新たな視点を知ることができます。課会を通して同僚性が高まるとともに、研修担当者の学びを深めることができます。

課会をもとに実施した若手教員研修でのグループ協議は、教員どうしが活発に対話する様子が見られました。研修後の受講者の振り返りには、「自分のこれからの授業実践研究を進めていく道筋を、同僚の先生方と話し合うことができた」、「今年度の研究テーマに関して同じ教科の先生方と議論を行ったが、授業についての新たな視点を得ることができた。特

に、「振り返り」と「つながり」というテーマで意見を交わした。生徒が主体的に振り返りをするには、それが次につながることを実感させることが大切だということを学んだ。これから、実践→記録→対話のサイクルによって授業力を高めていきたい」などが書かれており、対話を通して教師の学びが深まった様子がうかがえました。

私は、このような教育総合研究所での実践をカンファレンスで語ってきました。カンファレンスでの対話では、異なる立場の方(学生、異校種の先生など)からの感想や意見を聞くことで、自分の学びを深め

ることや次の実践への見通しをもつことができます。また、カンファレンスを通してできたコミュニティは教職大学院で学んでいる間だけでなく、いつまでも続くコミュニティになるような気がしています。カンファレンスでの対話からコミュニティが生まれ、生まれたコミュニティが自分を成長させてくれていると思っています。

これからも対話でさまざまなコミュニティをつくり、自分自身の学びを深めていきたいです。

「やってみよう」を大切にし、実践を軸とした学びをめざして

学校改革マネジメントコース2年/越前市吉野小学校 武藤 基彦

教職大学院での学びを始めてはや1年間が過ぎ、無事に2年生になることができました。入学した当初は仕事をしながら学びを深めていけるか非常に不安でしたが、職場の先生方や家族の理解、そして月間合同カンファレンスでの語り合いによって励まされながら学び続けることができました。小学校教員としての仕事を続けながら、新たな学びを深めることができるのが教職大学院の最大の強みであることを感じた1年間でした。

校内研究を推進していく研究主任として「学び続ける教員集団」をつくるためにまずは若手教員のコミュニティづくりを当面の目標としました。また、「やらされ感のない研究」にすることもめざしました。

若手教員のコミュニティづくりについては、上手くいったとはいえませんでした。それは、若手教員のニーズを私が深く把握しなかったために、コミュニティの目的が曖昧になり参加する意欲が高まらなかったことが原因です。それはコミュニティづくりの段階では気付かなかったことで、夏期集中講座で「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読んだことで気

付きました。理論と実践の往還とありますが、まさしくそれを実感しました。

「やらされ感のない研究」については、授業について語り合うような場を設定することについて大変苦労しました。何に苦労したかと言えば「時間の確保」です。先生方は大変多忙で授業改善に興味や関心があっても研究に時間を割く心の余裕がないように思えました。それでも月間合同カンファレンスでの語り合いでそのよさを感じていたので、自分の職場にもそれを取り入れたいと思い、語り合う時間を確保しました。語り合いの当初はなんだかやる気が感じられませんでした。だんだんと盛り上がりを見せ終了時刻になっても終わらないグループもありました。適切な話題と場、そして時間を確保することによって、教員同士の話し合いや語り合いは盛り上がるということが分かり、マネジメントの大切さを実践的に理解できました。

こうして校内研究のマネジメントを軸に学びを深めていった1年間で、次年度はそれを土台にして若手教員とベテランをつなぎ「教員同士の学び合い」をテーマにして学校改革のマネジメントを実践的に学び進めていこうと考えていました。

が、令和5年度は教務主任を任されることになり研究から教育課程をマネジメントしていく立場となりました。また、若手教員のサポートも校務分掌上位置づけられました。研究のマネジメントということは研究主任の先生に譲り、学校全体の学びを考えていくことが私のテーマになりそうです。児童の学びをどうしていくか、それに伴って先生方の学び、研修はどうするか、と考えることはたくさんありそうです。考えることだけでは、学校はよくなっていきません。そのために、まずは思いついたことをやってみる。実践を大切にします。実践してそれを教職大学院の

カンファレンスで語り合うことでよりよくしていくことを今年1年間で取り組んでいこうと今の所考えています。

研究主任の立場ではよく授業改善といっていました。が、教職大学院で学ぶようになってから「授業づくり」と言うようになりました。学びを進めていく内に、改善という言葉はよくないものをよくしていくようなイメージがあるように思うようになったからです。立場が変わり教務主任として、学校改革ではなく「学校づくり」を考える2年生の1年間にしていきます。



5 月 月 間 合 同 カ ン フ ァ レ ン ス 報 告

現在地とこれからの展望

授業研究・教職専門性開発コース2年/坂井市立丸岡南中学校 原 智徳

大学院に入学してから、はや1年が過ぎた。今年度から、長期インターンシップは2年目を迎え、週間カンファレンスにおいては運営を行う立場となった。今年度の長期インターンシップや週間カンファレンスでは、昨年の段階では見えなかった視点や考え方に気付くことができるようになった。そのことに気付くことができた自分は成長しているのではないかと感じる。

このような成長が感じられるようになったのは、昨年度一年間の経験があったからではないかと思う。入学したばかりのころは、教員という仕事をわかっていなかった。授業をはじめ、子どもとの関わり方や行事、裏方としての仕事など教員には様々な仕事があると分かった。また、どうしたら子どものためになるか、どうしたらよりよくなるかなど、知ることによってそのような疑問が生まれてきたと感じる。そして考えを深めることができるようになったと感じる。このような自分の軸となるような視点や考え方

が少しずつできてきたことが、自分の成長につながっていると思う。

また、このような成長に伴って、カンファレンスへの参加の仕方が変わっていったように感じる。正直、昨年の4月の時点では、週間カンファレンスや月間カンファレンスなどにおいて何を話せばいいかわからなかったり、他の人が言っている単語や意味合いなどが理解できなかったりした。しかし、一年間カンファレンスなどを通して議論していくうちに、それらのことが分かるようになっていった。また、長期インターンシップでの経験が増えることによって、より深く、意味のあるような議論ができてきたのかと感じる。そのため、何も考えずに参加していたが、自分の経験との共通点や考え方について考えるというような参加の仕方に変化した。

このように、振り返ってみると自分の成長を感じられた5月のカンファレンスであった。今年度は、長

期インターンシップ2年目だけでなく、週間カンファレンスの運営面にも携わることとなったので、さらに良い経験ができることを期待している。

「今」の学びに込める

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市至民中学校

魚見 晏那

教職大学院で学び始めてから2年が経ち、5月の合同カンファレンスは3度目の参加となった。2年前は、5月の合同カンファレンスは新型コロナウイルスの影響もあり、オンラインでの開催だった。緊張しながら慣れない画面越しで話すカンファレンスは、遠方の方と繋がることができるという良い面もあるが、話すタイミングの取り方が一方的になってしまうオンラインは難しかった。今年のカンファレンスは新型コロナウイルスの影響も少なくなり、対面での開催が通常化している。開始前・終了後も話したくなってしまうだけでなく、学びをみんなで話し合い、深めていく良さといった、対面のありがたさを感じている。

今回のカンファレンスで行われた話し合いの中で印象深かった話題は、『求められる学習と変わる試験問題』である。ここでは、現在行われている入試や学力調査の実態からどのような学びが子どもたちに求められるのかについて話し合った。なぜこの話題が印象深かったかというと、今の私の悩みに重なっているからである。今年度に入って、インターンシップに加えて非常勤講師をしている関係で多くの授業実践を経験していると、今私が行っている授業は子どもたちの学びに沿っているのかと疑問に思うことがたびたびあった。私の中では、授業は子どもたちが主役となるように、話し合いを中心に保健や体育を行っていた。しかし、今私が行なっている学びは本当に今子どもたちが求められている学びなのかと疑問に感じていた。

話し合いの前に読んだ資料は昨年度に行われた大学共通テストの政治・経済の問題で、私たちの時代に受けていたセンター試験と大きく違っていった。何が大きく違うかというと、問題の資料である。図や表、資料など、私たちが受けていた時よりも情報の量が多くなっている。そして、ただ“知識”を問うだけでなく、そこから考える“思考”と学びが生活文脈化している情報の+αが問われていた。情報を得るだけでなく、それを既得の知識と結びつけて考える。この学びをどのように教師として授業に取り入れるか、学びの本質を学びの中で抑えていくことが重要ではないかと感じた。そして、子どもたちの中に必然的に残る学びを実現させる必要があるのではないかと。また、グループでは新しい学びは協働的な学びも重要になってくるのではないかと話があった。インタビューや対話文では、話していく中で何が重要か学んでいくこと、それを知識や技能と結びつけることがとても重要であると分かった。

この5月のカンファレンスを終えて、今非常勤講師やインターンシップを進める中で抱いていた悩みのヒントを得ることができた。今、自分の行っている学びは間違っていないと考える。しかし、資料を活用しながら学びを深めたり、+αの学びに繋げたりできてはいなかったと考える。5月の合同カンファレンスを通して、今の授業で取り入れなければならない学びは何なのかを捉えなおすことができたのではないかと。この学びを今後に生かすためにも、自分の行っている授業を省察し、子どもたちに求められている学びにつなげたい。

自分と向き合う

ミドルリーダー養成コース2年/東京学芸大学附属高等学校 千葉 美奈子

今回のカンファレンスでは、勤務校での現状を把握しようと試み、ミドルリーダーとしての役割を自覚し、学校改革への道のりを具体的に自分事として考える第一歩をやっと踏み出せた。やっとと記しているのは、私がこの第一歩を踏むまで1年もかかってしまったという気持ちがあるからだ。5月のレポートは、今までになく、自分と向き合う覚悟で書いてみた。それを読み直し、カンファレンスを振り返り、「自分と向き合う」こととはどういうことなのか、改めて考え直した。

4月のカンファレンスで、私のレポートは、話す内容が書かれた単なる客観的なレポートで、そのことについて自分が考えたこと、疑問に思ったことがないということにファシリテーターの先生の質問により気づかされた。振り返ると1年時のカンファレンスでも、「そのことについて千葉先生はどう感じたのか」という質問を何度も投げかけられていた。そこで、5月のカンファレンスでは話し合いの内容の焦点となっている「問い」をすぐにメモすることを心掛けた。それらは以下の5つだ。1. 学校づくりの一員として自分ができるとは何か。2. 「自分が主体となり、こういうことをしたい、してみよう」と考え、実践につなげることができているか。3. 入試(出口)を意識し、逆設計で実践を計画できているか。4. 自分にとって探究とは。5. 考え、話す、書くことができる子どもとは。

今までカンファレンスのメモは箇条書きで、グループメンバーと話し合った内容を中心にまとめていたが、「問い」を記述することによって、メモの取り方も「問い」を中心に自分の気になった点を記述するスタイルに変わった。

そして、カンファレンス終了後のレポートを書く時には、この「問い」と向き合い、話し合いを振り返

りながら、その問いに対する自分の考えを書き記した。

読み直し、この「問い」の中で印象が強かった4. 自分にとって探究とは。 について振り返る。レポートでは、以下のように記した。

探究は学びのサイクルそのものである。探究を実践し、研究できる環境に自分がいたことをこの1年で自覚している。しかし、それについて意識的に考え、自分自身が学びのサイクルを自覚し、行ってきたのかというとそうではない。つまり、自分事として意識し、それについて自分のことばで語ることが果たしてできるか。今回対話を通して、それはできていないのではないかと思った。つまり、活動の背景にある目的や意義、価値づけを行っていなかったことが明らかになった。

この問いを考えることにより、下線の部分にある、新たな問いが生まれた。

前任校の東京大学教育学部附属中等教育学校では、探究を長年実践してきた。カンファレンスでの探究についての話し合いの中で自分は「探究」のことを語ることができないと思った。このレポートを書いた後、授業づくりや学級づくりを行う際、自分が探究を意識的に取り入れていることがわかった。探究活動を自分事として認識し、自分の中での価値づけが起こったのは、カンファレンスでの話し合いとそのレポートを書いたこの2つの段階があったからだろう。

このように、5月のカンファレンスではこれまでの実践の価値づけをすることがやっとできるようになった。今後も「自分はどうか考える？」と自分に問いかけ、一つ一つの疑問点を大切にしていきたい。1年もかかってしまったが、そこから自分の課題が明確になり、長期実践報告のテーマを具体化し、目的への道のりができるのだろう。

振り返り、そして・・・

学校改革マネジメントコース2年/福井市藤島中学校 大橋 圭子

そろそろニュースレターの締め切りだ。テーマは「5月合同カンファレンスの振り返り」だったはず。記憶の新しいうちに・・・というメールをいただいていたのにと、悔やまれる。ラウンドテーブルが終わり、やっと焦ったわたしがしたことは、5月のカンファレンス記録を読み直すこと。グループ①でのセッション「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」では、岐阜聖徳付属中のインターンの方、明新小のインターンの方と一緒することとなった。一人のインターンの方から「インターンの立場はどこまで」という話が出された。もう一人のインターンの方からも「自分は長期の教育実習生のような感覚でいるのではないか」という話が出されて、インターンはどのように子どもたちと関わればよいのか、立ち位置は？などといったことが話題となった。そのお話を伺って、日々悩みながら、取り組んでいらっしゃるのだなということが伝わってきた。と同時に、自分が前任校で、メンターとしてインターンの方と関わったことが思い出された。今の自分だったら、当時のインターンの方とどんな関わりをしたらろうかと。

教職大学院で学ばせていただくようになり、現在2年目を迎える。異動と同時にスタートした教職大学院での学びの日々。合同カンファレンスや集中講座、ラウンドテーブル、長期実践研究報告会等に参加させていただく中で実感していることは、「語り合うことって楽しい」ということだ。まさにこの一言に尽きる。この語り合いの楽しさは、異動当時の自分を救ってくれたものであり、現在の自分にとっての大きな支えとモチベーションになっているものだ。一緒にいる校種や立場や職種や年齢の違う方々からの話をお聞きすることで、自分はどうかんだろうということに常に気づかせていただける。そこからこうしていこうというふうに考えを進めていくことができる。自分が語る側であれば、語っていく中で、自分

のやっていることに価値付けとまではいなくても、つまりはこういうことであったんだという気づきを得て、方向を修正したり継続したりすることができたということも実感している。そんなことが実現しているのは、ご一緒してくださる方々が、同じ場で語ってくださり、自分の話を聞いてくださるおかげであって、その方々がいてくださってこそ実現していることなのだと今更ながら思い至る。まさに、学び合うコミュニティが成立しているのだと思う。

グループでご一緒した先生がおっしゃっていた、インターンの方は子どもたちの育ちを支える仲間であり、子どもたちの学びを共有し合える仲間なのだ、という言葉が痛烈に胸に響いたことを思い出す。当時の私にその意識がもてていただろうか、と。今自分は勤務しながら教職大学院に通わせていただいて、学んだことと勤務校での取組が往還していくように心がけながら日々を積み重ねている真っ最中だ。一方、インターンの方々は、毎日をインターン先で過ごすわけではなく、わからないことも多くあるのもきっと実状。そのことに思いを至らせながら、インターンの方と向き合っていたらどうか。きっと十分ではなかったのだと今になって思い出される。今の自分だったら、インターンの方を協働する仲間として認識し、その関わりも当時とは変わったものになっていたのではないかと思う。が、その関わりを通して、自分自身が考えた経験、不十分ながらもインターンの方と関わり合いながら、国語の先生方とも相談しながら一緒に授業について考えていった経験は、今の自分の若い先生方との関わりを作っていく上で、少なからず自分をつくってくれたものの一つと捉えたいと思う。

さて、勤務校では、今年度から4つのグループでの授業公開が始まった。前任校で木村先生から教え

ていただいた形で始めた授業公開は、今年度、小林先生のアドバイスをいただいて、公開するチームごとにテーマを追究するものとして、学校を変えて展開していこうとしている。まだ、5月の第一回目を終えたところではあるが、この取組が、回を重ねるにつれてどのチームのテーマの追究も少しずつでも高まっていくことで、学校全体の渦となっていくといいなと願っている。

5月のカンファレンスを振り返ることは、図らずも自分のインターンの方との関わりを振り返り、勤務校での自分の果たすべきことを考えることにつながった。まさに、記録をもとにこれまでに思いをはせる経験となったと感じている。



運営協議会実施報告

去る5月24日、福井大学総合教職開発本部の運営協議会及び連合教職開発研究科の運営協議会が、オンラインで開催されました。

運営協議会は、総合教職開発本部及び研究科それぞれの運営や事業計画について協議することとなっていて、メンバーは県内外の教育行政機関の長、拠点校、連携校の校長によって構成されています。

当日は、福井県の豊北教育長からご挨拶・メッセージをいただいたほか、柳澤総合教職開発副本部長、木村連合教職開発研究科長が挨拶を行い、令和5年度の計画について協議が行われました。会議には、県外からの参加者7名を含む教育委員会、学校、こども園など多様な機関からの関係者35名が参加しました。その後、大学スタッフを加え、5つのグループに分かれて、グループ別協議が行われました。グループ協議では、「令和の日本型教育」を実現していくための教職大学院の取り組みや校内研修をはじめとした、教員研修のあり方などについて、熱心な議論が交わされました。

次回、第2回は、2024年3月14日（木）に開催の予定です。

当日レジュメ

令和5年度第1回

福井大学総合教職開発本部運営協議会並びに
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科運営協議会、同教育課程連携協議会

- 1 日時 令和5年5月24日（水）13:00～15:00
- 2 会場 WEB会議システム（「Zoom」にて開催）
- 3 内容
 - （1部）（連合教職開発研究科運営協議会・教育課程連携協議会）
 - 13:00～13:05 連合教職開発研究科長あいさつ
 - 13:05～13:15 福井県豊北教育長あいさつ
 - 13:15～13:25 全体協議
 - 1 令和5年度年間計画について

事前配布資料：令和5年度年間計画、拠点校・連携校一覧及び担当教員、東京サテライトの動向、令和5年度学生募集スケジュール

（2部）（総合教職開発本部運営協議会）

- 13:25～13:30 総合教職開発副本部長あいさつ
- 13:30～13:40 全体協議
- 1 令和5年度年間計画について
- 2 教員養成フラッグシップ大学の進捗について
- 3 その他（次回第2回運営協議会3月14日（木））

事前配布資料：国際教職開発、地域教職開発、インクルーシブ教育 各部門令和5年度年間計画、中堅教諭等研修

- 13:40～13:50 休憩
- （3部）13:50～15:00 グループ別協議

【グループ討議参加者】

グループ	所属（学校名、教育委員会名）
1	福井県教育庁教職員課、教育総合研究所、嶺南教育事務所、特別支援教育センター、教職員支援機構
2	福井市教育委員会、越前市教育委員会、岡谷市教育委員会、宮古島市教育委員会
3	附属義務教育学校前期課程・後期課程、福井市明新小学校、同中藤小学校、同至民中学校、同安居中学校
4	鯖江市神明小学校、高浜町立高浜小学校、福井大学教育学部附属附属幼稚園、福井校成幼稚園
5	福井市清水中学校、小浜市立小浜中学校、岐阜市立加納中学校、法政大学中学高等学校、福井県立武生高等学校、同若狭高等学校



公開研究会等の紹介

令和5年度 福井大学教育学部附属特別支援学校公開研究会

オンライン

「一人一人の学びが深まる
カリキュラム・マネジメント」

(4年計画3年次)

(兼 第44回福井県特別支援学校教育研究大会)

サブテーマ

「子どもを出発点とした学びをデザインする」

期日 令和5年 8月 9日(水)



ごあいさつ

本校では、知的障害のある子どもたちが、主体性を持ち、生活の必然性に従いながら日常の生活内容を題材にして学んでいく「生活教育」を実践しています。本校の生活教育には、児童生徒の実態に合わせられる自由度の高さや柔軟性がありますが、その一方で個々の実態把握やねらいの設定、学びのプロセスなど、一人一人に最適な活動をつくるためにどうしたらよいのかという課題が見えてきました。授業づくりと事例研究を通してこの課題を検証していこうと考え、「一人一人の学びが深まるカリキュラム・マネジメント」という研究テーマを掲げて研究計画をスタートさせました。1年次は「最適な活動」をキーワードに、各学部の核となる活動で学びを深める授業づくりや活動の構想、教師の支援のあり方を研究してきました。2年次は「学びのプロセス」を意識しながら、子どもの育ちの広がりや学部や活動のつながりを考えて授業づくりを検討してきました。そして、3年次の今年度は、子どもの発言や行動、発意を見取ることに焦点をあてて、子どもを出発点とした学びのデザインを考えています。

今回の公開研究会では、国立特別支援教育総合研究所の主任研究員、真部 信吾氏に、知的障害のある子どもたちへの支援をどのように評価していけばよいかをお話していただき、これまで続けてきた生活教育を見つめ直す一つの契機にしたいと思っています。

例年、年度の後半に公開研究会を行い、研究成果を報告させていただいておりますが、今年は福井県特別支援学校教育研究大会の全体会を兼ねての発表ということで、夏季休業中に研究会を行います。本年度の実践期間が限られた形での報告にはなりますが、皆様からのご意見をいただいて、充実した研究会にしたいと思います。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。

令和5年6月 福井大学教育学部附属特別支援学校 校長 岩井秀夫

後援/福井県教育委員会 福井市教育委員会 福井県特別支援学校教育研究会

令和5年度 公開研究会（兼 第44回福井県特別支援学校教育研究大会）

事前配信

【当日資料】※8月1日（火）に資料を Google ドライブ に配信します。当日までにプリントアウトするなどしてお手元にご用意ください。

・本校の全体研究概要のスライド資料 ・学部研究概要のスライド資料 ・各学部の事例のスライド資料 ・講演会資料

当日の研究会

（午前の部）

受付 9:00～	特教研開会式 全体研究概要 9:30～10:00	休憩	学部研究会	連絡
			学部の実践と事例の報告・協議 10:15～12:00	
	全体	グループ 分け	研究会の6グループ （小学部, 中学部, 高等部それぞれ2グループ）	全体

・6つのグループに分かれて報告と協議を行います。参加申し込みの際に、下記の内容表からご希望の実践報告を第2希望まで選択してください。後日メールにて参加グループをお知らせします。

（午後の部）

受付 12:30～	講演会配信	閉会式 14:30～14:40	連絡
	独立行政法人 特別支援教育総合研究所 主任研究員 真部 信吾氏 13:00～14:30		
	全体		

◆ 内容 午前の部 学部研究会（各学部の実践・事例の報告・協議）

当日は、①～④の実践・事例の報告・協議会に分かれて参加していただきます。

小学部・中学部を希望された方は、2つのグループに分かれて協議していただく予定です。

【小学部】

学部 研究会 （申込番号）	①
	「安心して心地よく遊び、『好き』を広げる、深める」～6年生～ 集団での活動や慣れない活動に参加しにくい6年生の児童。安心できる環境で友達や教師と場やものを共有し、言葉やものを介したやり取りを通して思いが伝わる経験を重ねていく。その中で、生活の幅が広がることを願い、本児が好きなことも手がかりにして、「好き」「してみよう」「もっとしたい」を見つけ広げていく事例。

【中学部】

学部 研究会 （申込番号）	②
	「自分の発意の実現を軸として、自己の視野や経験を広げたり集団意識を高めたりする」～3年生～ 活動に対して発意やアイデアはあるものの、他者に伝えられなかったり、行動に移せなかったりした生徒。様々な活動を通して、自分の発意の実現や他者の発意の受容、協働を経験し、他者とのつながりを感じ、自己肯定感を高めていく。自己の視野や経験を広げ、集団意識を高めて将来に必要な力につなげていく事例。

【高等部】

学部 研究会 (申込番号)	③	「様々な活動や人との関わりを通し、自己理解を深めて、自分を受け入れていく。～周りの力を借りながら一歩踏み出していけるように…～」～3年生～ 過去の辛い思い出から自分に自信が持てず、入学して2年間で自分の居場所や信頼できる人、やりがいを見つけて少しずつ力を付けてきた生徒。仲間との協働や学び合いの中で、自分の視野を広げたり、自分の強みも弱みも受け入れたりして、周りの力を借りながら自分なりの方法で一歩踏み出し、自己肯定感を高めていく事例。
	④	「好きなこと、得意なことを存分に生かし、広げながら、今と将来の『生活』をともに考える」～2年生～ 安心できる関係の中で自己調整活動に取り組んできた生徒。様々な活動を通して教師とともに「自分」について考えながら自らの意志で行動を選択していく事例。

◆ 内容 午後の部 講演会

『知的障害教育における授業づくりと学習評価』

知的障害のある児童生徒に対する教科別の指導及び各教科等を合わせた指導において、授業の充実がどのように図られるか、また、評価の充実はどうつなげていくかを整理していただきます。

講師：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

主任研究員 真部 信吾 氏

略歴 山口県内の特別支援学校で、研究主任や特別支援教育コーディネーター等を歴任
やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事、
山口県教育庁特別支援教育推進室 指導主事 を経て、
現在は、国立特別支援教育総合研究所研修事業部 資質向上支援担当 主任研究員として、知的障害教育における教育課程や学習評価等の研究、自閉症支援に関する研究に取り組まれています。

※午前の部のみ、午後の部のみの参加も受け付けています。

研究助言者

()内は所属, 職名

全体 研究助言者	
笹原 未来氏 (福井大学連合教職開発研究科 准教授)	
各学部 研究助言者	
小学部	小嵐 恵子氏 (福井大学連合教職開発研究科 客員教授) 南雲 敏秀氏 (福井大学教育学部 講師)
中学部	笹原 未来氏 (福井大学連合教職開発研究科 准教授) 藤岡 徹 氏 (福井大学教育学部 准教授)
高等部	荒木 良子氏 (福井大学連合教職開発研究科 准教授) 廣澤 愛子氏 (福井大学連合教職開発研究科 教授)

※当日は、学部研究会のグループで協議に参加していただきます。

申し込みから研究会までの流れ

申込

- ・申し込みURLもしくはQRコードより申し込みください。※7月6日(木)締め切り
- ・申し込みの際にはGoogleアカウントが必要になります。取得方法については本校HPに記載してあります。

ご準備

- ・参加受付完了メールをお送りします。
- ・7月21日(金)に接続テストやグループ分けに関するメールをお送りします。
- ・8月1日(火)に当日資料をGoogleドライブに配信します。
- ・当日参加されるグループの研究資料を御準備ください。

ご参加

- ・(午前の部)は全体研究概要、学部研究概要、実践事例について報告させていただきます。学部研究概要、実践事例については各グループに分かれて協議を行います。
- ・(午後の部)は真部信吾氏による講演会を実施いたします。

ご意見
ご感想

- ・指定のフォームより、アンケートに御記入いただき、御質問、御意見をお寄せください。
- ・今後の研究活動に活かしていきます。

本研究会へ御参加の方へ

- 申し込みが確認できましたら、本校から受付完了メールを送信します。1週間経っても返信が無い場合は、電話にてお問合せください。
- 研究会参加申込に、Google アカウントが必要です。Google ドライブを使用し、事前資料を配信させていただきます。
- 本校ホームページに Google アカウント、Google ドライブの説明があります。申し込み前に一度御覧ください。
- 本研究会は Zoom を使用します。事前にインストールしてください。
- オンラインでは、カメラ、マイク、イヤホンの御用意をお願いします。
- ・イヤホンを使用いただくことで、ハウリングを防ぐことができます。
- 資料は8月1日(火)に配信します。当日資料は印刷して御準備ください。
- 参加者向けに、7月26日(水)に接続テストを実施します。詳しくは、後日連絡します。

申し込み方法

☆7月6日(木)までに、申し込みフォームからお願いします。

・申し込み URL: https://docs.google.com/forms/d/16MJEE56_K7DapDbX3l_7ZYGUDtKqK66iKHmZWv84/edit

- ・URL または、QR コードから必要事項を御入力ください。
- ・参加費は無料です。
- ・オンライン参加に必要な Zoom の ID やパスワードは入力されたメールアドレスに送付いたします。前日までにメールが届かない場合は、お手数をおかけしますが、下記のお問合せ先まで御連絡ください。 本件担当(研究主任 岩佐成樹)



お申し込み・お問い合わせ先 福井大学教育学部附属特別支援学校

〒910-0065 福井県福井市ハツ島町1-3

TEL 0776-22-6781

E-mail fukui-dt01+futoku04@fukui-ed.jp

ホームページ <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~f-tokusi/>

教職への扉をひらく 長期インターンシップ

福井大学連合教職大学院

実践力ある21世紀の教師を育てる
教職大学院の先端モデル

オープンキャンパス（オンライン）

2023年 **8月17日(木)** 13:00~15:00

参加をご希望の方は「オープンキャンパス希望」と件名にお書き添えの上
dpdtfukui@yahoo.co.jp まで御連絡ください



学校で1年間週3日 実践経験を重ねる。＜インターンシップ＞

総体を学ぶ 授業づくり・生活指導をはじめ教職の総体を学ぶ
仲間と学ぶ 仲間や先輩と語り合う週間カンファレンス
充実した支援 学校の現職教師と大学院の教員がチームで支えます

実践と理論のサイクルをつくる。＜実践研究＞

学校での経験をとらえ返し、検討し、問い進める実践研究

教職への歩みを支える。＜財政支援の充実＞

一般の奨学金・学費免除等に加えて、福井大学連合教職大学院独自の
スカラシップ（奨学金）をはじめとする就学支援制度を進めています。

◆当日の予定

13:00 全体説明

14:00 現役院生との
座談会

連絡先

福井大学連合教職開発研究科（連合教職大学院）
〒910-8507 福井県福井市文京3丁目9-1
Tel. & Fax. 0776-27-9872



入試情報の詳細

Schedule

7/1 Sat. 7月月間合同カンファレンス A 日程

7/8 Sat. 7月月間合同カンファレンス B 日程

【夏期集中講座】

7/22,23,24 Sat. Sun. Mon. Cycle1a

7/25,26,27 Tue. Wed. Thu. Cycle1b

7/29,30,31 Sat. Sun. Mon. Cycle2a

8/1,2,3 Tue. Wed. Thu. Cycle2b

8/5,6,7 Sat. Sun. Mon. Cycle3a

8/16,17,18 Wed. Thu. Fri. Cycle3b

9/16,17,18 Sat. Sun. Mon. Cycle3c (予備日程)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。

修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。

関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】巻頭言では、エジプト日本学校プロジェクトとその一環として教職大学院で行っているエジプトの先生方への研修を紹介しています。この研修は教職大学院にとっても重要な活動となっていますので、ぜひ、ご一読いただけたらと思います。間もなく夏期集中講座が始まります。様々な研修も行われ、教職大学院にとっての「学び」の季節が本格化します。Newsletter は、皆様の熱い夏を応援しています。(H)

教職大学院 Newsletter

No.173

2023.7.7 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp